

# LA REVUO ORIENTA

1 9 3 7

JARO XVIII

N - R O 7

J U L I O

Monto FUĴI kaj Lago Kaŭaguĉi



JAPANA ESPERANTO-ISTITUTO



卷頭言	久保貞次郎	243
國際補助語協會 (IALA) の活動について	高木弘	244
圖書館とエスペラント	磯崎巖	249
放送願末	大谷正一	253
再び全國婦人同志に	婦人エスペラント聯盟	254
動詞 fari の用法	小坂狷二	255
MIGRANTO	松田周二	259
Orientaj Legendoj pri la luno	大野政一	265
Venuso	城内忠一郎	268
日本エスペラント大會起草委員會に與へる公開狀	神戸エスペラント會	269
日本エスペラント大會規約案 (神戸)	同上	270
新刊紹介		272
全國各地報道		273
エスペラント運動後援會		280
Esperantistoj Vin Atendas		281

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

## 財團法人 日本エスペラント學會

東京市本郷區元町一の一三

—【電話小石川(85)5415番—振替口座東京11325番】—

目的	エスペラントの普及、研究、實用
事業	(a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表 (b) 雜誌及圖書の刊行及外國エス語書籍の取次 (c) 講演會講習會の開催及後援 (d) 其他本會の目的を達成するに必要な事業
會費	(a) 普通維持員 年額2圓40錢 (b) 正維持員 年額3圓 (c) 贊助維持員 年額5圓 (d) 特別維持員 年額10圓以上 (e) 終身維持員 一時金100圓以上
維持員へは	La Revuo Orienta を無代配布する他當會取次洋書の割引等をなすことあり
本會の	普通維持員を除く他の維持員はすべて國際エスペラント聯盟 (IEL) の普通會員 (simpla membro) となる
入會手續	住所 職業 姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい

會則及發行及取次内外圖書目錄要郵券二錢

### 役員名簿 (五十音順)

理事長 大石 和三郎	同 東郷部長 土岐 善麿	理事(常任) 三石 五六
理事 井上 仁吉	同 警 西 成甫	同(同) 美野田 琢磨
同 元東北大校長 井上 萬壽藏	同 藤澤 親雄	監事 警 鈴木 正夫
同 上野 孝男	同 監督局長 前田 穰	同 堀 眞道
同(常任) 小坂 狷二	同 警 望月 周三郎	同 清水 勝雄
同 中大教授 川原 次吉郎	同 警 柳田 國男	同 高女校長 丸山 丈作
同 文 博 黒板 勝美	同(常任) 大井 學	顧問 法 博 穂 積重
同 暇光局 田 誠		同 子 三 島 章道



# LA REVUE ORIENTALE

Jaro XVIII

N-ro 7

Julio

1937

## エドマンズ氏を迎へて

「小生は最近日本に來朝したアメリカ人です。言語による相互理解の促進の問題に就いても興味を持てをりまして、國際補助語協會(ニューヨーク)の理事會の一員をつとめてをります。御都合によろしければ、山王ホテルへ御來訪をお願い申上げたく存じます。」といった文面の手紙が、學會や二三の同志のところへ舞ひこんで來た。この手紙の主は、東京の各新聞でその來朝を報ぜられた日本に International House (國際會館)建設のため、歐洲訪問の途中、六週間滞在の豫定で立ちよつたハーリー・エドマンズ氏である。國際會館はアメリカでは既にニューヨーク、シカゴ、ボストン、パークレーに立てられてゐる。主としてその國に留學する學生、教授等の宿舍、其他の設備をもつたもので、多くの國々の人が滞在してゐる。ロックフェラー財團の援助によつて設立されたものである。エドマンズ氏はロンドン、ジュネーヴ、エスタンブール、ベルリン等と共に東京にも設立したい意向をもつて來朝したのであつた。

一方同氏はニューヨークにある國際補助語協會 (IALA) の理事であるので一夕日本の國際語研究家と談じたいといふ希望を洩した次第である。(IALA については、丁度高木弘氏が本號に詳細に、しかも同協會の進む可き方向までも正當に判斷した紹介論文を寄稿してゐるから、これを参照されたい。)

約束の6月3日(木)山王ホテルを訪れた。小坂、佐々城、三宅氏に小生が學會方面から、他に石黒氏が見えられた。

談合には甚だ遺憾のことに、E氏がエスペラント語が全く出来ないために、英語を用ゐるより他に道がなかつた。話しの主要點は「1940年を機會に、國際補助語協會の大會を日本で開催しないか?」といふ提案であつた。出席した我々の側では、甚だ結構なことではあるが、果して歐米から多數の参加者があるか、疑問だ。しかし出来ることなら大いに努力してみたい。ついでには、先づIALAの名前でも、又其他公の機關の名をもつて、或は又Edmonds氏個人の資格でも、日本の關係諸官廳、及び國際關係の諸團體(振興會、以下十數團體)へその提案を試みて貰ひたいといふことを希望した。それは是非努力してみるといふ返辭であつた。

次にこの際國際語問題について一般の注意を喚起するために、講演會を東京に開催したらとの提案。これは諸準備の都合がつけば同氏の滞在中開くことに決定した。

さてこゝで我々が氣のつくことは、日本で國際補助語問題について、關心を示してをる人々が極く少人數であるといふことである。例へばE氏のリストにのつてゐる——即ちIALAの本部のリストといふことになる——日本の國際補助語研究者といふのが、全部で5人、それが悉くエスペランチストであるといふことである。(このリストは、同協會へ本を注文するとか、直接訪問したとかで一應の連絡のついた人のみを集めたのであらう。)してみると如何に同協會を利用してゐないかが解る。ところで同協會は文献としては可成り派なものを發行してをるの



である。これによつて見ると日本の言語學者や言語研究家も國際補助語について、全くの無關心を表示してをると見てよい。又多くの事實からこの推定は獨斷ではない様である。

ところで、エスペランティストのみが、我國では國際語問題を研究してをるといふ名譽を與へられたとして、何だか面映ゆい感じが無いではない。何故なら、吾々の間にエスペラント語以外の他の國際語をそれ程集注的に研究してをる人々が澤山をる譯でもなく、又、その質に於いても誇る可きものがある譯でもない。又エスペラント語そのものについても、その使用、及びその内部的な活動は盛であつても、客觀的にその價值を決定するやうな科學的研究はまだまだ放任されてゐる。例へばエスペラント語が、日本語を移すのに、どの程度まで正確性をもつかといふ事についても、分析的な調査が行はれてゐるといへない。IALA では既になしとげてゐやうな、自然語と人工語との學習に於ける關係も充分な調査がなされてゐない。

さう考へてくると、ひどく見すばらしくなるが、何もこの見すばらしさは、決定的なものではないのだから、我々エスペランティストが協力してこの方面の分野を開拓することに努力しようではないか。

—Junio 15, 37 久保—

## 國際補助語協會 (IALA) の活動について

### ——國際語協定の試——

TAKAGI-HIROŠI

#### 1

エスペラントの歴史お讀んだ人わ、その初期のところ、ザメンホフがエスペラントお發表するまえに存在していた《アメリカ哲學協會》のことお知つたであろー。この會わ、有名なフランクリンが創立した學會で、19世紀の末、國際的共通の言語の必要が一般に強く感じられたとき、まっさきにこの問題お取りあげ(1887年10月)、當時廣まつていたヴォラビクお調べ、その結果、この言語が國際的言語としてわ不適當なものであることお認め、新に國際共通語に必要な條件6項目おつくりあげたのであつた。そして、翌年になつてエスペントの存在お知り、これが最も適當な國際的言語であることお認めて、國際語問題の解決のために科學團體の國際的會合お開くことに決定した。ザメンホフわこの協會の決議にたいして非常な期待おかけ、《Aldono al la dua libro》(1888年)で、よろこんでこの決議について述べ、さらにこの協會の催そーとする《大會がエスペラントに與える最後的形式わ、大會がエスペラントお見わけられないほどに變更する必要があるとしたとしても、國際語のすべての友にとつてわ權威あるものである》とまで言つて、この大會の成功にエスペラントの運命おかけていたのであつた。

しかし、まだ一般の科學團體わ國際語問題について積極的であることができず、ザメンホフの期待した大會わ行われずに、國際語の原則についての決定おしただけで、この協會の國際語にたいする活動わ消えてしまつた。さらにまた、1891年にわ《アメリカ科學振興協會》が同じよーな試おやつたが、これもまた成功することができなかつた。

そこで、ザメンホフわ社會的權威に頼つたり、例の千萬人の約束お集める他力的な試おダン然すて、自分の力で新しい運動の進むべき道お切りひらいていきだしたのであつた。かくして、國際語運動わエックリと、しかし堅實にエスペランティスト大衆の集團的な共働によつて實際的な力お増していつたのであつた。



その一方、アメリカ哲學協會のはじめたやり方による國際語問題の解決の試み全く跡おたやしたわけではなかつた。あの〈國際語選定代表者會〉の仕事わや、社會的に一般的な形式的な決議によつて問題お解決してしまおーとする形式主義者の試の跡おついだものである。これわ、當時の文化の片隅にすぎなかつたアメリカの實際主義者の試とわちがつて、世界文化の中心パリーの有名な數理哲學者クチラーお大將として、ヨーロッパの多くの高級インテリとともにやつた仕事であつただけに、その華やかさわ目ざましいものであり、さすがのエスペラント運動も崩れるかとも思われた騒ぎお引きおこしたが、結局、實お結びそこねて、イード運動とゆう出きそこないの國際語運動おはじめることになつてしまつた。

國際語の問題お國際的な専門的な會議によつて討議し、その選定おおこない、それによつて一度に問題の決定的解決お得よーとするこれらの傾向わ、その動機においてわなんら非難すべきものお持つていない。國際語として現在最も力あるエスペラントの運動がいろいろの社會的事情のためにすこやかに急速に延びることのできないとき、その存在お強めハッキリさせるために、公的にしろ、私的にしろ、社會的に有力な機關によつて國際的な認定のスタンプが得られるとすれば、その運動わ現在と同じエネルギーおもつてしても、數倍の生長力お得ることができであろーことわ明かである。しかし、これら傍系的な試がエスペラント運動とピッタリ結びつくことができない點にいまゝでの試の失敗の原因があつたのである。

それについて、われわれわさらに、つぎに紹介するアメリカの《國際補助語協會》(International Huxiliary Language Association, IALA (イアラ))の活動によつて、モット近代的な形で明かにすることができるであろー。

## 2

IALA わ 1924 年アメリカの金持夫人モーリス (A. V. Morris) の力によつて出きたものである。彼女の夫わ最近までベルギー駐在アメリカ大使であつた。UEA のストヤンが作つた大きな國際語文獻カタログ《Bibliografio de Internacia Lingvo》わ彼女の物質的精神的助力によること相當なものであつたらしい。ストヤンわ巻頭に彼女の寫眞おかけ、丁重な献本の言葉お記している。

このモーリス夫人の心お動かして國際語問題に関心お持たせたものわ何であつたかわ知らないが、この會が出きる土臺となつたのわ、1919年アメリカの世界的電氣技術家コトレル (Frederick G. Cottrell) お議長として作られた《國際調査會議》(International Research Council) がこの問題お取りあげ、アメリカおはじめ各國の科學振興會がそれに加つたこと、と 1921 年に UEA のブリヴァの活動によつて成功した國際聯盟におけるエスペラント教授調査が行われることになつたことであつた。すなわち、世界大戰後におけるエスペラント運動の著しい發展に刺戟されたのであつた。この《國際調査會議》のアメリカにおける活動が國際補助語研究の團體結成に發展して 1924 年に出きたのが IALA である。

IALA の現在の役員わ會長《ニューヨーク・タイムス》の編輯者フィンイ、名譽書記モーリス夫人、書記シェントン(シラキューズ大學社會學教授)たちで、會の中心となる數種の委員會があり、主としてアメリカの知名の人々から成つてゐる。會のプログラマーモカ現在と將來の 2 時期に分つて、現在においてわ、一つの一定の言語についての同意お得て、その言語の公的承認お求めることお目標とし、將來においてわ、その認められた言語お世界的に確立することお



目ざすものとしている。どれでもよいから、とにかく人工的國際補助語お世間に認めさせて、國際的言語生活の矛盾お解決しよーとゆうのが目的なのである。

現在の時期における IALA の主な活動わ、したがって、(1) 國際語の利益のために一般的關心おあふり、(2) 客觀的な立場から國際語のすべての問題お調査し、(3) 國際補助語運動の統一戦線お得るためにさらにお互いに努力する、とゆう三つの方向にわかれるのである。

一般的社會的關心お高めるためにわ、コトレルやモーリス大使わラジオで放送おやり、アメリカ各地に地方委員會おこしらえ、パリーに調査委員會お置いて、各地の知名の士に働きかけている。しかし、この仕事より、調査の仕事の方が具體的なまとまつた效果おあげているよーである。この調査の仕事わ、さらに區わけして、1) 言語學習方面の調査、2) 國際會議における言語問題の調査、3) 言語學習的研究、とされている。

1) の言語學習の調査わアメリカでわ、コロンビア大學教育研究所教育心理學部長ソーンドイク教授 (Edward L. Thorndike) によつて行われ、a) 人工語 (constructed language) と國語 (ethnic l.) との學習の容易さの比較、b) 自國語またわ外國語の學習における人工語の影響、についてアメリカの各學校での實驗によつて調査され、報告された。<sup>\*</sup> ヨーロッパでわジュネーヴの教育學研究所長ボーヴェ教授とドイツのディテレレによつて調査が行われた。

2) 國際會議における言語問題についてわ、IALA の書記シェントン教授 (Herbert N. Shenton) によつて研究調査が行われた。年に 250-300 も行われる國際的諸會議における言語的矛盾お指摘し、シェントン教授わエスペラントが優れていることお示している。彼の報告わ 800 ページおこえる大きな文献となつて 1934 年に發表された。<sup>\*\*</sup>

3) 言語學的研究わコリンソン (W. E. Collinson), ミューラー, サビアによつて行われている。コリンソンわエスペランティストとして有名で、エスペラントで言語學の本 (Homa lingvo, 1926) お出している、アカデミーオの有力なメンブローである。リヴァプール大學のドイツ語學教授。サビアわイエール大學教授で、一般言語學者としても世界的に名のある人である。アメリカ式な社會學の傾向おその言語理論に見せてゐる。この言語學的研究わ a) 言語の論理的・心理的基礎の研究、各國語各人工語の比較研究から成り、すでに 20 餘の業績が出きているが、そのうち出版されたものわ僅かにすぎない。

活動の第3の仕事である國際補助語運動の統一戦線のための仕事わモーリス夫人の音頭取りのもとに行われ、各人工語の代表者、言語學者、國際團體の役員お中心とする國際會議が1930年と1931年に開催された。これわ IALA の援助によつて行われた國際言語學大會のことで1930年から1年おきぐらいに開かれている。第1回大會わジュネーヴでひらかれ、一般的言語學的問題について討議が行われた。とくに國際補助語問題についても協議が行われた。主な出席者わイエスベルセン(議長)、コリンソン、デブルネル、フンケ(ベルン大學教授)、ヘルマン、バイイ、セシエ(ジュネーヴ大學教授、フランスのソシユール言語學の代表者)、カルチエフスキなどの一流の言語學者と各國際語の代表者、エスペラント——ペルヌー、ストヤン、イード——ジークフリード、アウエルバハ、ノヴ・エスペラント——ルネ・ド・ソシユール、オクツィデンタル——ワール、ノヴィアル——ザイドラーたちであつた。そこでわ、IALA の

<sup>\*</sup> *Language learning*: Summary of a Report to IALA. Division of Psychology, Institute of Educational Research, Teachers College, Columbia Univ. New York, 1933, 59 p.

<sup>\*\*</sup> *Cosmopolitan conversation*: The language problems of international conferences, Columbia Univ. Press, New York, 803 p.



協働者イェール大學教授アサカワ(日本人)氏によつて報告が行われ、IALA の保護のもとに統一戦線が行われる必要が全員にみとめられた。

1931 年にジュネーヴで開かれた第 2 回國際言語學大會でもフランス言語學界の代表者メイエ教授司會のもとに國際補助語の問題が論議された。IALA の仕事について説明したパンフレートにたいして多くの賛成意見が述べられた。それに賛成した數十人の目ぼしい言語學者のうち、東京帝大の市河三喜博士の名も見える。大會わ一つの選定された言語案について決議おやりわしなかつたが、言語學者の最初の國際的會合で國際語の問題が提出され、たいした反對にも出あわず、多くの人たちがだいたい國際補助語そのものに賛成したことわ、われわれの注目に値する事實である。しかし、でわどの言語案がよいかとゆう問題になると、さぞ百人百色で大へんな騒ぎになつたことであらう。

IALA の具體的な活動わ以上のよゝなものである。この活動の輪廓からも見てとれるよゝに、IALA わ現在の諸人工語案おすべて同格に見て、それらに基いてすべての人(とくにインテリ)の要求お満足させる決定的な人工語おこしらえあげることお志している。そのための具體的方策についてわモリス夫人お中心に集會お通じ、また個人的に、研究された。去年日本お去つた文部省イギリス語教授顧問ハロルド・パーマー氏わコリンソンと一所にブラッセルでモリス夫人と國際語妥協案の相談おしたと言つていたが、それわ夫人お圍つての會談の一つであつたのである。かくして、これらの度々の相談わ具體化されて、1935 年の末に一つのプランとして發表されるに至つた。それわ IALA の現在の活動お最も明かに示すところのつぎのプランである。

### 3

そのプランわ《補助的世界語についての協定お得るためのプラン》(A Plan for obtaining agreement on an auxiliary world-language)とゆう名お持つている。

その目的とするところわ《1) 一定の人工語の決定、それわすでに實證された有用さお持つ現存する人工語に基くか、またわ思想と行動の指道者に認められている言語學的心理學的標準に一致するよゝな諸言語の總合に基くものである。2) その言語の權威ある公的な承認》にある。そして、この目的お遂行するためにわ、a) 言語研究、b) 促進、c) 準備、に分けて活動すべきであるとしている。

a) 言語研究の仕事わ IALA の協定委員會(議長デブルネル、コリンソン、ヴァンドリエス、モリス夫人)がまず決定的國際語の形態についての言語學者の共同研究お指道する。會合お催したり資料お作つたりする。委員會やその催す協議會でわ、國際語の機能、國際語の言語的心理的規準、この規準にたいする現存國際語の關係、およびその規準にしたがつて現存國際語お訂正する可能性お示す資料、理論的實際的特質の調和などが問題とされる。そしてこれらの検討の結果、2-3 年のちにわ、問題の専門的研究者の團體として《國際語研究所》(International Language Institute)のよゝな形のものが組織される。

その一方、促進委員會わ國際的交信に關心お持つ各種團體の指道者お招いて、人工語の一般的思想の廣般な支持お得ることや一般的承認お得るために活動する《國際語委員會》(Int. L. Comission)とゆうよゝな權威ある團體おこしらえる。

さらに將來、決定的國際補助語が認められたあかつきにわ、その國際語の發展の安定と繼續とお計るために永久的な公の《國際語アカデミー》(I. L. Academy)お設ける。



この堂々たる(!?) プランは 1936 年 1 月 ブラッセルのアメリカ大使館における 4 日間にわたる IALA 協定委員会の会で開始された。ベルギー、イギリス、フランス、オランダ、スイスから 12 人の言語学者が集まり、このプランとともに、国際補助語の性質についてつぎの規定お立てた：人工国際語は、《1) 異つた母語お持つ人民のあいだでの直接の交信の中だちとして（たとえば、旅行、通信、學術的報告、ラジオ、映畫、トーキーなどにおける）、2) 一つの民族語 (ethnic l.) から他の民族語え移るときの反譯の標準的中だち、標準語として、3) 一般的言語學習の基礎として》、の機能お持つべきものとしたのである。

かくて、IALA のプランは《国際語研究所》の設立に向つて進みだしたわけである。

なお、最近わが國に來朝しアメリカの財團の命令で東京に數百萬ドルお投じて國際會館おこさえる準備おしている IALA の理事の 1 人ハリー・エドモンズ氏は 1940 年に東京で IALA の總會おやる意向おわれわれに傳られ、また IALA の事業について近く東京で講演おされるところである。

#### 4

以上で、だいたい IALA の活動について述べたが、この會が《國際語選定代表者會》の試の失敗から得た經驗にもとづいて、舞臺うらでコッソリ用意した國際語案お國際的會合の名で世間に押しつけよーとしたイディストの愚さおくりかえさない點は大いによいとしなければならないが、《アメリカ哲學協會》から傳統おひくこの IALA が國際語問題の本質についての理解においてまだ形式的であることお残念なことだとしなければならない。

われわれエスペランティストは、なにも IALA に向つてヤミクモに反對するほど血迷つてもいないし、われわれの力が IALA に無視されるほど弱いものだとも考えていない。エスペラントが他の國際語にくらべてダン然優れた力お持っていることお、IALA の人々みずから認めているところである。

したがつて、問題お國際語お實踐的に最も正しく解決し、最も力ある理論お經驗的に自分のものとしているエスペランティストが積極的に IALA に助力して問題の解決のために力おつくし、IALA が第 2 の《國際語選定代表者會》とならないよーに骨お折ることにある。

IALA おクチャーたちの會とおちがつてそんなに獨善的なことおやらないであろーが、IALA がその存在の動機お正しく生かし、人類全體の共通の問題である國際補助語問題お最も效果的に解決するためにわ、現在唯一と言つてもよいエスペラント運動の理論と實踐との成果お充分に理解しなければならない。

IALA のやつているいろいろの調査おなかなか貴重なものである。外國語學習における人工語問題お調査したり、言語學的に言語の心理的論理的基礎お研究したりすることお、國際語の一般的基礎づけとした大切な問題である。また、國際語の問題に最も専門的に關心お抱くべき言語學者の公的承お得よーとする努力も非常によいことである。しかし、國際語の問題の當面している現在の段階おヴォラビク發表以前の書齊的研究の段階でわなく、國際語おすでに半世紀にわたる大衆的集團的實踐お經過し、かずつの淘汰によつて一つの國際語に發展している段階にあるのである。したがつて、集團的な實用によつて生き生きと發展している國際語にたいして積極的な理解お持ち、それお押しすすめるに必要な助力お與えることが、國際語問題解決のための唯一の道なのである。それだから、國際語のためのすべての研究、すべての調査おエスペラント運動のために行われることによつてはじめて正しいものとなることおできるの



である。この事實に疑お抱くものわ、《國際語選定代表者會》の嫡出子であるイードによつてエスペラント運動が、どれだけの利益お得たかお考えてみるがよい。イードの大手術によつて、エスペラントわ多年なやまされつづけた改造問題からはじめて解放され、エスペラント單語理論お確立することができ、イードからいろいろの新語單語お貰つて、國際語についての問題わエスペラント運動のうちで解決されるべきことが明かにされたのである。このことわ 1907 年においてすでに、エスペラントが國際補助語としての資格お際分に備えていたものであることお證明しているのである。

それにもかゝらず IALA が現實的な言語生活についてわほとんどなにも知らない書齊的言語學者のすべてが賛成するよーな(したがつて不可能な)國際語お求めよーとしているのわ第 2 のイードおこさえよーと骨お折つているのに似ている。國際語問題わいまゝでの個人主義的な言語學者の意思お無視して發展してきた。ある單語やある文法形式にたいする好き嫌いなどわ大衆的な言語運動にとつてわ問題でわない。もし現在のエスペラントに直すべきもの、付けわえるべきものがあるならば、それわエスペラント運動の問題として取りあげ検討されるべきである。

IALA のメンブロわ、その大勢の役員たちの顔ぶれから見ても、上層階級の人たちから成りたつていることわ明かである。この點にクチラーの試と同じことおやりかねない社會的根據があるし、大衆的なエスペラント運動にたいする認識不足の生じる土臺がある。問題お社會的こ見ず、技術的に末梢的に理解する可能性がある。しかし、彼らがクチラーの轍をふんで、第 2 のイードおこしらえるにわ、またエスペラント以外の實用性の缺けている國際語案お選定するにわ、エスペラントの運動わあまりにも力強いものに生長してしまつている。もし IALA がこわからの決定でエスペラントお無視するか、それおユガめるかするならば、その存在わクチラーの委員會と同じ末路おたどるであろーし、またエスペラント運動の力お正しく意識し、それと協力することになるならば、エスペラントわ社會の上層階級の積極的支持お背景に國際補助語としてその存在おますます強め、實用の深さ廣さお幾倍かにすることができるであろーし、それによつて IALA 自身の目的とする國際的言語生活合理化の技術的手段としての國際補助語の確立おはたすことができるであろー。

1940 年に東京で IALA の會合が開かれるかいないかわ別問題としても、われわれエスペンティストわ IALA が國際語問題の解決のためにプラスお與えるよーに活動することお望んでやまない。

## 圖書館とエスペラント

——我々の重要な任務——

ISOZAKI-Iūao

最近エスペラント運動後援會と婦人エスペランチスト聯盟とで企てられた圖書館綠化運動の豫想以上の發展は極めて喜ばしいことだ。

ついでには、我々のエスペラント運動のこの新しい分野の開拓について、なほ一層の發展の爲に、多數の人々の力や智恵を集めたいとの發企者の方々の主旨から、求められるまゝに述べた愚見を、希望に委せて、公表して一般の批判を仰ぐことにする。



## 1. 圖書館事業の意義

かつて、シベリアの教育家、セリセフが日本に来て、エスペラントによつて、學校附屬圖書館の現状や日本に於ける社會教育の發達につき研究調査を企てたことがあつた。併し、當時の日本のエスペランティストの實力では彼の希望を十分に満足させることが出来なかつた。實際、我々は未だ、圖書館事業の情勢やその意義について餘り知らなかつたのだ。それが、今、我國エスペラント界の各方面から圖書館への注意が起つて來たことは非常に有意義なことである。此際我々は更に一層意識して、圖書館事業其物の意義を理解することは極めて必要なことと思ふ。元來圖書館には色々な意義と任務とがある。例へば現在の日本エスペラント學會や UEA の圖書館のように、その専門に關する文献を極力安全に「保存」といふことは圖書館の發達史上第一の任務であつた。次ぎには、藏書を整理し、貸出規定を設け、人々の「研究」に資するといふのが中心的任務になつた。然し今日では圖書館の任務は更に一步進んで來た。それは圖書館といふ施設を、「社會教育」の機構として、民衆の利益の爲に運用することである。この方針は昭和 8 年の文部省令による「改正圖書館令」の精神に明らかに現れてゐる。

現在、我々民衆の教育の機構として、主要なものは「家庭」と「學校」と「社會」だといふことが出来るであらう。そして、家庭には父母や家風や人倫道德が規範になり、學校には夫々計畫的な教案があり教師があり、ともかく纏まつた教育が行はれてゐる。然し、もつと必要な「社會教育」は現在甚だ雜然として、效果も擧らない。日々出版される多くの書籍や新聞雑誌や、青年婦人其他の色々な團體や各種の展覽會や講習會等は夫々重要な社會教育の手段であるが、それ等を合理的に自覺して利用しないならば效果は擧らない。然るに、この合理的な計畫的な整理の方法が十分發達してゐなかつた。現在、我が日本では、教育の爲の全機構の再検討が必要になつて來てゐる。そして、その重要部分として學校制度の改正のことも課題に上つて來たが、更にそれよりも廣汎で而も從來未發達であつた社會教育の合理的發展の問題が重大な課題となつて來た。そして、新たな學校制度の外に、なほ一層、民衆特に青年層の自發的教育の機構として、圖書館制度の整備が重要視されるに到つた。

改正圖書館令及びそれに依つた施行細則は圖書館を社會教育の中心機構と規定し、その管理運用の系統を整備し單に圖書の保存閱覽事業だけでなく、地方の事情に即した講習會、展覽會等の事業を行ふ機關とし、その運用には單に圖書館の職員のみでなく、教育方面の専門家等を加へた圖書館委員會を持ち、また民間より圖書館後援會を作り、之等の活動によつて、圖書館をして、適切な社會教育を行はしめる方針が立てられてゐるのである。

## 2. エスペラントと書籍文化

我々エスペランティストはこの圖書館事業の社會教育上の意義とその機能や機構について十分深い理解を以つて、參加協力を始めなければならぬ。抑々エスペラントが出現し發展し得たのは、近世教育の發展といふ素地があつたからである。今後なほ一層の發展を實現する爲には、教育の今後の發展の動向としつくりと結合しなければならぬ。

從來、エスペラントが普及發展して來た方法は主として、新聞雑誌、書籍、講習會、通信等によつてゐる。そして之等は皆近世に發達した文化的要因である。その内講習會は近世的學校制度の發達に伴つて發達した教育技術の應用である。新聞雑誌は近世の出版技術と通信技術との發達によつて促がされた一種の文化機構である。そして之れも有力なる社會教育の一要素である。書籍もまた無論近世出版技術の產物であり、有力なる社會教育手段である。

我々エスペランティストは今迄色々、エスペラントを學校制度の中へ導入する爲に意識的努



力を試みた。しかしそれは未だ十分な効果を上げてはゐない。しかし一方、新聞雑誌や書籍によるエスペラント運動は自明のこととして、殆ど無意識に續けて來た。そして此の方の效果は相當見るべきものがあつた。即ちエスペラント運動は近世の教育機構の中、學校制度との關係よりも、出版文化即ち社會教育との關係に於いて一層多くの効果を上げて來た。而も出版文化の機構や動向について、餘り十分な理解や計畫的努力を拂つた譯ではなかつたのだ。茲によく考へて見なければならぬ意義がある。即ち、エスペラント事業は所謂正規な學校教育よりも、社會教育的諸事業と多くの關聯を持つて居る。日本でエスペラントが學校で教授された事例を詳細に調べて見ると、東京神戸、岡山等の勞働學校や、盲學校や、農村青年協同學校やセツルメントや職業學校等、學校とは言へども多分に社會教育的性質を持つた所で歡迎され、効果を上げてゐる。

エスペランチストが社會教育について、今一層の理解を持つて意識的に、計畫的に仕事を進めるようにしたならば、必ず著るしい効果を上げることが出来るであらう。

今、同志の中多くの人々が圖書館事業に對し、注意を拂つて、活動や研究を始めたことは、非常に喜ばしい、有望なことである。即ち、今日の圖書館は社會教育の中心機構として、書籍や雑誌や展覽會や講演會や講習會や其他多くの社會教育活動の統合機關として發達させ運用されようとしてゐるのだから。

### 3. エスペランチストは圖書館事業に如何に盡くす可きか？

社會教育的事業へのエスペラントの導入は今迄にも、少年團や赤十字事業や、禁酒運動や、肉食主義運動教育活動寫眞事業等に關聯して試みられてゐる。今後益々注目して發展させられなければならぬものに、青年團體や青年學校へのエスペラント導入の課題等がある。それ等はいつれ今後追々に研究して行きたい。

當面、圖書館事業に關してエスペランチストは如何に努力すべきかを考へよう。

イ、エスペラント關係の圖書の寄贈。これは、同志達によつて現在始められてゐる仕事であつて、これは先づ第一に重要なことである。この寄贈事業を通じて、各圖書館當局とエスペラント界との緊密な親善關係を結ぶことや、寄贈用圖書やその購入資金の募集運動を通じて全國のエスペランチスト達の間に圖書館の重要さの再認識の爲の自己教育をすることが出来るのは極めて有意義な效果であるが、なほ、この事によつて一般の公衆に對して、圖書館の利用を少しでも促進するように努力することは必要である。我々エスペランチストは、エスペラントの普及の爲圖書館を利用することを考へるはかりでなく、圖書館事業の一層の發展の爲にエスペランチストの奉仕力を發揮するのだといふ根本態度が必要だと思ふ。

ロ、更に進んで、圖書館を眞に社會教育の機關として發展活動せしむるように、我々全國各地に、分布してゐるエスペランチストは夫々その社會的地位に應じて、或は圖書館委員會の活動に参加し、或は圖書館後援會を組織し、又は單純なる圖書館の閱覽者の立場からも讀者會を開催する等の方法によつて、貢獻するように努力しなければならぬ。こうして、圖書館の發展の爲にエスペランチストが奉仕するならば、又圖書館の側からも、エスペラントの爲に、講習會の開催や例會の會場貸與等の方法によつて貢獻して貰へるようになるのである。

ハ、なほ、一層必要なことは、我々エスペランチストは、其の特殊な技能たる國際語活用によつて、圖書館事業に貢獻する事を實行しなければならぬといふことである。日本の圖書館事業は、ヨーロッパやアメリカ等のこの事業の先進國に比すれば未だ甚だしく後くれてゐる。我々は大いに他國の經驗から學んでこの事業を發展せしめなければならない。我々はエスペラ



ントによつて世界各國の圖書館の事情を調査したり、各國の同志の協力によつて設備や運用の改善發達の方法を講ずることが出来る。

例えば興味あることは、ヨーロッパ等で近來發達して來た様式である所の、圖書と同時に實物標本を蒐集して、具體的研究に資する等の方法である。各國の風俗繪はがきとか、地圖とか動植物の標本とか、商品カタログとか手藝品商品見本とかをエスペラントによつて集め、展覽し、或は保存して、圖書による研究の際、實物を參照して研究する便を供する等の方法である。外國では圖書博物館として發達してゐるが、日本では之は極めて少ないようだ。場所が狭くて保存出来ない事情もあらうが。それでも、地方別、専門別等によつて特に關係の深い標本を蒐集する等のことは意義深いことであつて、日本のこの種事業に新しい發展を促すものである。

ニ、其他、研究すればなほ色々な方法や仕事がある。例えば、全國の隅々までの凡べての小圖書館にエスペラント圖書を一通り備え付けさすことは差當り不可能であらうが、主なる中央圖書館へ、巡回文庫用に組合せた揃を作つて提供するとか、大都市の多數の小圖書館へは特殊なエスペラント圖書は目録だけを備えて、閱覽希望者へは、共通の保管所から廻はす方法等によつて、公衆に對して高級な研究便宜をも作ることなども有意義であらう。又、エスペラントに關しての極力完全な中央圖書館を作り、合理的な閱覽規定を作り、又他の圖書館との間に協定等を作つて、協力して運用の便を計るとか、未だ次第に色々な仕事も出來て來るであらう。聯合青年團では農村の青年團附設圖書館用の出版物を作り、その組合せの文庫を發賣してゐる。エスペランティストの方でも圖書館事業の發展に應じて、農村青年團圖書館向きの組合せ等も必要となるであらう。

それにつけても、今回、この社會教育への關心を機縁として、我々は大いに自覺するのである。即ち、エスペラント運動は單に、エスペラントを學べと呼ばわるだけでなく、エスペラントによつて世の中の役立つように盡力するとゆう態度に進まなければならないといふことである。

## S-ro Ŝ. Nakahara Ĉeestos

### XXX-an Univ. Kongreson en Varsovio

S-ro Ŝ. Nakahara, fervora samideano kaj estro de Librejo Kaniĵa, en Kioto, ĉefredaktoro de TEMPO, monata Esp. Gazeto, ĉeestos la XXX-an Universalan Kongreson en Varsovio. Samtempe en Komerca Ekspozicio Internacia, kiu estas okazigota najbare al la Kongresejo li ankaŭ prezentos diversspecajn varojn speciale produktitajn en Kioto, sub la aŭspicio de Komerca kaj Industria Ĉambro en Kioto, kaj li volas montri per ESPERANTO komercan KIOTOn.

Ni tutkore salutas al Kongresanoj, ke vi varme akceptos nian samlandanon.

*Japana Esperanto-Instituto*



# 放 送 顛 末

OOTANI-MASAKAZU

昨年末、大連より奉天に移住後、滿州の 에스運動に關する種々の事情を、祖國の皆様へ報告したいと、本日迄に幾回となく考へたが、公務方面の晝夜に亘る多忙と、それに、報告したいと考へる事項があまりに自分の動靜に關したことのみなので、流石に面はゆく本日迄差控へて來た次第だが、最近、祖國よりの同志數人の訪問を受ける悦しい機會を持ち、その誰もが「滿州の 에스運動が此のやうに活潑なものとは知らなかつた。何故學會へ報告しないのか」と質問を受けること數度に及んだ。考へてみれば、成程、毎月の R. O. の報道欄を見ても時折、大連のものが出てゐるばかりで、これでは祖國の同志の認識不足なのも無理は無いと思はれる。

渡滿後、公務出張を利用して出來得る限り滿州各地の同志を訪問してゐるので、現在の滿州の 에스運動が略々解つて來てゐるが、それは後日にゆづり、今日は、去る四月十五日奉天放送局より全滿中繼(除新京)にて放送した趣味講座「エスペラントの話」の拙稿をお送りをする。

厚顔にも敢て拙稿を送る所以は、此の一文を以て祖國の同志に、日本とは全然異つた社會情勢にある特種な現在の滿洲國に於ては、如何なる點を強調すれば、エス運動の生命があるかを、拙稿を読んで察して戴きたいからである。諸種の事情で詳細に記述することを差控へるが、今や事變後五年、我が日本の深き協力と援助と、加ふるに新國家國民の努力に依つて、内に外に、あらゆる點に於て充實向上し秒を追つて驚異的に發展進歩してゐる現状で、文字通りの「王道樂土」が著々と實現しつつあるが、廣大な滿洲國の遼遠の地では未だに共產匪、其他不逞の徒輩の横行絶えず、加へて廣範な國境線上何となく無氣味な暗雲低く垂れこめてゐる此の時、如何に日滿兩軍の日夜の努力が貴重なものであるかを深く認識し、又何故に私の放送が、些の干渉掣肘も無く放送することを許され、そして、一般人士に相當多くエスペラントを再認識させ得たかを考へてほしい。

去る2月1日滿鐵哈爾濱ヤマトホテルの開業記念に際しての廣告放送のラジオドラマを社命に依つて私が書上げ、人員不足のため出演までやり、其の節、放送局の人々と懇意になり、拔目無くエスペラントの豫備宣傳をしておいたので、今度の放送交渉も嬉しい程順調に進んだ。たゞ残念だつたのは此方の希望する4月14日には最早プログラムが確定してゐたので、どうにも都合つかず、翌十五日の午後6時25分より同55分の趣味講座の時間になつたことだつた。

4月8日、約10日に亘る出張旅行より歸社すると放送局にて、15日に放送確定との電話が來たが、困つたことには、公務多忙で晝夜暇無く、その上、家族を大連に残してゐるため手もとに參考書が皆無と云つた状態だつた。

有體に白狀すると、此の間、何回と無く、到底準備の出來ない事を悟つて、放送局に斷りの電話をかけやうと、受話機を手にした。けれど折角擱んだ好機會を、むざむざと手放したことが解れば、私を育て下さつた祖國の諸先輩の激怒のほども思はれて、その都度思ひ止つた。

幸に當時、城戸崎氏より贈られた「エスペラントの智識」の拔萃見本があつたので、それを其の儘氏には非常に心苦しくは思つたが流用した。

脱稿したのが當時の午後4時半。放送は與へられた30分を一1秒もあまさず使つた。

現在、放送局より全滿中繼の夏季語學講座の交渉を受けてゐる。これは、勿論當方より希望



するところだが、放送當局より希望して來ただけに、祖國の同志も、一そう悦んで下さることと思ふ。

又、現在著々と準備中のものに、當地新聞社後援の大々的な**初等講習會**がある。

尙、下記放送原稿は、新聞社の希望により4日間に亘つて紙上に連載された。

終りに、城戸崎氏に御禮と御詫びを申上げる。

大谷氏は、目下滿鐵會社鐵道總局旅客課に勤務されてをる同志である。氏は上の報告記にそへて奉天の新聞紙上に掲載された講演内容の切抜を學會宛送られた。それは「慕進の國際補助語エスペラント談議」と題されて、(1) 創案者故ザ博士二十年祭に當りて。(2) 絶對中立で何處の國にも屬さぬエス語の第一の條件はこれです。(3) 創業者ザ博士の生ひ立ち。(4) 國を愛するが故に之を學ぶ、初めて習ふ方々への御注意の各項に亘るものである。

——編輯部——

## 再び全國婦人同志に

婦人エスペラント聯盟

### I. 圖書館綠化運動中間報告に替へて

私達の手による全國圖書館綠化の企てを發表いたしましてから既に二週間すぎました。半分の自信と半分の危惧を、私達はその第一步に感じたことは事實であります。併しこの祝福すべき二週間は半分の危惧を全部的な自信に替へてくれました。何故なら、その二週間に殺到した寄附申込は早くも二百圓をはるかに突破してしまつたからです。全國の同志諸氏の熱心な支援、エスペランティストでない知人、友人の暖かい理解と同情、それ等をひしひしと胸に感じて、ともすれば涙ぐましくなるのは單なる女の感傷でありませうか？ 感傷であれ、何であれ、兎に角私達の心からなる感謝の中に仕事はあらゆる種類の人々の絶大な支持を受けて、斯くも速かに完成の域へ急いでゐます。その時に當り私達の最も遺憾とする事は、この二百餘圓が主として中央の聯盟員の活躍によつて集つたものであり、私達を激勵し援助して下さるのは主に男性の同志であるといふ事實です。私達の期待を裏切つて婦人同志からは何の反響もありません。併し私達は皆さんが黙々として私達の仕事に協力して居て下さることと信じて疑ひません。

集つた二百餘圓は賛助員其の方々の自發的な御寄附と中央聯盟員が努力して募金したもので、殘額二百餘圓中現在收入の見込のあるのが五十圓程あり、殘る百數十圓こそ全國の婦人同志の手に俟つものであります。考へてみれば百數十圓は僅かな額です。七十人の聯盟員が四口宛出しても既に百四十圓ではありませんか？ 併し、失費も豫想外に多額でありましたから、目的額四百二十五圓をはるかに越す程の額こそ望ましいのです。地方の婦人同志にとつては仲々困難な仕事でありませうが、既に道は半ば以上歩まれました。ゴールは私達の目前にあります。奮起してラストヘビーをかけようではありませんか。

猶、寄附金の外にカニヤ書店から《綠の星に憧れて》を八百五十部、林好美氏から《ヨーロッパ親類めぐり》を五十部寄附されました。

ついでに圖書館からの回答の概觀を次にしるして諸姉の御參考に供します。詳細な統計は後日發表いたします。



## II. 圖書館問合せの回答を整理して

先づ第一に感じられた事は、全国的に見て洋書が少なく、特に地方に於ては古く出版された書物が大部分を占め、新刊書が非常に少ないと云ふ事である。此は回答中にも屢々見出されたのだが、豫算が僅少で新規購入不能、まして語學の部門迄は中々手が延びないと書いてあるのが非常に多い。その爲めではないかと思はれるのである。又思ひ掛けない山の奥に不思議な取合せの蔵書を持つてゐるのがあつたが、此は大方エスペランティスト個人の寄贈によるものであらう。その筆頭は京都府立圖書館の 470 冊でもあらうか。

或る縣の如きは 1 冊の本が 867 回、514 回も閲覽されてゐるところもあるし、又二三の館では度々エス書を要求されるがないので困つてゐるからぜひ欲しい、又或る館では益々必要性を感じてゐるからぜひカタログを送つてくれと云ふて來てゐるものもある。

兎に角 806 通の問合せに對して今日迄に 449 通の回答を得、其中 132 館がエス語書籍所蔵館、317 館が無所蔵、其中で 116 館が備付を希望し寄贈を欲してゐる。

村立、町立、市立、府縣立圖書館（此の中町村立のものは小學校、中學校に設けられてゐるものが多い）を除く私立圖書館は、地方殊に北陸地方方に於いては佛教關係の支持によつて設けられたものが多く、キリスト教關係によると記されてゐるのが一館も見出されないと云ふ事は、農村に於ける文化的役割に於て佛教が隱然たる勢力を有してゐる事を示してゐるものではないかと思はれる。

蔵書種別に見ると模範エスペラント獨習が 45 で第一位、千布氏のエス全程、石黒氏のエスペラントの學び方等の順位となるが、いづれにしても初等のものが斷然多く又閲覽回数も此種のものが一番多い。又寄贈を希望してゐる館でも初等のやさしい程度のものからと要求してゐるものが多いのである。（整理係）

★誤植訂正——前月に締切期日 7 月 15 日とあるは 7 月 30 日の誤。

## 動詞 FARI の用法

(15)

K. OSSAKA

§7 (a) „Fari“ kiel Nekompleta Transitiva Verbo (Verbo de Kaŭzo).

„Fari“, kiam ĝi havas la senperan objektan komplementon, akompanantan sian predikaton, estas ekvivalenta al „igi“: *fari* (=igi) *ion ia* (「何を何にする」)。Ekzemple: „oni faris min generalo“ = „Oni faris, ke mi estu generalo“ (LR 42/16). Jen kelkaj pluaj ekzemploj:—

Sed vi plu neniam *faros* min mokitaĵo. (FI 14/29) もうおれをお前たちのなぶり物にはさせて置かぬ。

Se vi *faros* vin ŝafo, la lupoj vin manĝos. (P 288) 汝若し已を羊となせば狼汝を食はん（弱身を見せるとひどい目に遭ふ意の諺）。

Kiu *faris* lin hetmano super ni? (Rt 109/-9; *ank. vd.* 102/24) 彼をおれ達の首領に擔ぎあげたのは誰だ。

Li amis ŝin, kiel oni povas nur ami bonan belan infancn, sed *fari* ŝin reĝino tio ĉi



neniam venis al li en la kapon. (FII 63/-8; *ank. vd.* FII 142/-8) 彼はこよなく(いやしくも氣だてのよい美しい子を愛するとならば愛し得る出来るだけの程度で)彼女を愛したのであつた、然し彼女を皇后にしやうなどと云ふ事は思ひも浮べなかつた。

Kio mi volas **fari** min, estas mia afero. (Rt 13/18; *ank. vd.* BV 67/8; Rn 8/11) 何におれがなろうとそれはおれの勝手だ。

Ne **faru** min plej malfeliĉa homo! (Rz 87/17) 私を不幸な人間にして下さるな(どうぞ私の望みを叶へて下さい)。

La konscienco **faras** nin timuloj. (H 75/-3) 良心と云ふものがあるために吾々は憶病者になるのだ(良心が吾々を憶病者にする)。

Li, Kristoforo Kolumbo, estos **farita** granda admiralo de Hispanujo. (FK 103/4) 彼コルムブスは西班牙の大提督に任ぜられることになつてゐる。

Ĝoja koro **faras** la vizaĝon ĝoja, sed ĉe ĉagreno de la koro la spirito estas malgaja. (SS 15-13) 喜び内にあれば表に現はれる(喜べる心は顔を喜びに満たしめる)、心に懊ある場合には氣は減入るものである。

Vi diras, ke vi estas malfeliĉa, kaj nun vi alian patrinon volas **fari** tiel same malfeliĉa. (FIII 5/3) お前は不幸だと云つてゐる、處が今度はお前が他の母親をお前と同じ様に不幸にしやうとしてゐるのだ。

Eble vi aliajn, kiuj ne estas en pli bona stato, ol mi, povos konvinki, ke ili **faru** al si sian situacion kiel eble plej oportuna. 多分あなた様なら私よりももつとよくない状態に在る他の人々を説きすゝめてその人だちが自ら自分達の況遇を出来るだけ過ごしよいものとする様に會得させて下さる事が出来ませう。

Sur ŝia vizaĝo estis ĉarma decida trankvileco, kiu **faris** ĝin pli aminda, o ĉiam. (BV 52/8) 彼女の顔には美しい覺悟をきめ込んだ色が表はれてゐて、そのためにいつもよりもその顔を一層艶にしてみた。

Mirinde lerte li, kanajlo, manovras la kartojn... kaj li **faris** min tute nuda. (Rz 24/-7) あの野郎とてつもなく花札のさばきのうまい野郎で、このおれを身ぐるみぬがせてしまやアがつた。

Grandiga vitro ĉion **faras** centoble pli granda ol ĝi estas en efektiveco. (FII 150/9) 擴大鏡は物が實際あるよりも百倍も大きくする。

Ĉu mi ankaŭ devas sekvi tiun ĉi „leĝon naturan“ kaj intence **fari** nian lingvon malregula kaj malfacila? (LR 18/9) 吾人も亦此の「自然法則」なるものに從ひわざわざ吾々の言葉を不規則にしてむづかしいものとなさねばならぬのであらうか。

Ŝajnas al mi, ke mi ne bezonas rekomendi al ŝi, ke ŝi **faru** la respondon agrabla. (GD 27/11) どうやら奥さんに色よい返事をする様おすすめる必要もなささうです。

La kontentigo de sia malsato **faris** ĝin kuraĝa. (FII 128) 空腹が醫えたので勇氣が出て來た。

*Rimarko (a)* Tiun ĉi uzon de la nekompleta transitiva „fari“ one povas parafrazi en malsimplan propozicion. Ekzemple: La kontentigo de sia malsato **faris** ĝin kuraĝa = ... **faris**, ke ĝi estu kuraĝa.

En ĝi vi trovos mian komision detale kaj ankaŭ dokumentojn, kiuj la dubon mem



**faros** kredanta (Rt 42/4) = ... kiuj **faros**, ke la dubo mem kredu (=estu kredanta). その中におれの云ひつけがこまごまと書いてあり又猜疑そのもの(即ち最も疑ひ深い人)をすら信ぜしむる様な證據書類が入つてゐる。

Li ne povis ilin rekoni, sed io nekonata **faris** pli rapide bati lian koron (FK 151/-9) = ...io nekonata **faris**, ke pli rapide batu lia koro. 彼は彼等が誰であつたかわからなかつた、然し何かわけのわからぬ氣持のために彼の心臓は一層鼓動を早めたのであつた。

*Rimarko (b)* En la sekvanta ekzemplo „onin“ estas subkomprenata:

Mizero **faras** lerta, mizero **faras** sperta (P 1135) = Mizero **faras** [onin] lerta... = Mizero **faras**, ke oni estu lerta kaj ankaŭ ke oni estu sperta. 艱難汝を玉にす(艱難が人を上手にし、耳羅を経せしめる)。

*Rimarko (c)* En la sekvanta ekzemplo la komplementoj staras en la formo de adverboj nur pro tio, ke ili estas transformiĝo de la predikatoj en senpersona verba konstruo:

**Faru** lume, varme kaj gaje! (BV 53/24) = **Faru**, ke estu lume, varme kaj gaje! 明るく、暖く、うき立つ様にして呉れ。

§7 (b) „**Fari**, ke...“ = „kaŭzi, ke...“ Kiel mi jam menciis ĉe la *Rimarko (a)* en la antaŭa paragrafo, tiu ĉi uzo estas metamorfozo de nekompleta transitiva „**fari**“ (kaŭzanta „**fari**“). Kelkaj ekzemploj:

Jen tio nin haltigas; tio **faras**, ke la mizeroj teraj longe daŭras (H 75/14) = ...tio **faras** la mizerojn terajn longe daŭri. さてこのために吾々は足を停めさせられる、このために地上の辛苦が長く続くやうになるのだ。

La sorto **faris**, ke ni ambaŭ kuŝis sub unu tendo. (Rt 46/-6) 吾々兩人は一つテントの下に寝起きするめぐり合はせになつた(運命が……する様にした)。

La Eternulo, via Dio, **faros**, ke viaj malamikoj, kiuj leviĝos kontraŭ vin, estos frapitaj antaŭ vi. (Re 28-7) 汝等の神なる主は汝等に双向ひて立つ汝等の敵が汝等の前に撃破さるゝ様にしてくれる。

Kaj Dio **faris**, ke oni Lin timu. (Pr 9/-4) 神は人々が神をおそれる様になし給ふた。

Ni **faros**, ke oni antaŭ li vin forte laŭdos. (H 140/6) 人が彼の面前でお前をえらく褒めあげる様にしかけやう。

## [EKZERCAJ TRADUKOJ II 解]

1. La (malvenko de la) batalo sur la Japano Maro **faris** (aŭ donis) al Rusujo fatalan baton.

2. Ĉu vi ne **faris** al vi ian difekton?

3. Mi **faris** al mi (aŭ Mi ricevis) nur skrapvundeton sur la genuo.

4. Li **faradas** al si riproĉojn pro tiu malsukceso.

5. Kial vi **faris** al li promeson, kiun vi ne povas plenumi.

6. Li **faradas** ordonojn super la samklasanoj.

7. Li ne **faras** la impreson de elsaltegulo, kiu sin levis el malriĉeco (aŭ mizeroj).

8. Via vizito **faras** al ni vere agrablan surprizon.

9. Li vidis, ke la infanoj **faras** al si amuzon, turmentante la testudon (aŭ el la tur-



mentado de la testudo) kaj pro kompato li ĝin aĉetis (aŭ por ĝi donis monon).

10. Li faras en la nove pretigita redingoto siajn novjarajn vizitojn.
11. Bone, mi faros al vi la komplezon.
12. Ĉe lia apero la tuta ĉeestantaro faris varmegan aplaŭdon.
13. Pro tiu ago Dio certe faros al vi severan punon.
14. (Feliĉa) paro, kiu faris al si la ĵuron de amo (aŭ geedzeco) profunde.
15. Ĉu iu faros demandon pri la propono?
16. La bastono faras al blinduloj la servon de okuloj.
17. Atendu momenton! mi iros kaj faros al la fakestro la raporton.
18. Faru al mi afable la favoron.
19. Eĉ minaco al li faras nenian timon.
20. La sciigo faris al la patro grandan ĝojon (aŭ feliĉon, aŭ plezuron).
21. Por plenumi vian deziron mi faros ĉiujn eblajn penojn.
22. Pri tio mi jam faris al li aludon, sed ŝajnas al mi, ke li ne povis tion diveni.
23. Mi dankas vin por la servoj, kiujn vi al mi faris.
24. Por atingi la celon vi devas ankaŭ en via parto fari oferojn.
25. Kiu faris tiun ĉi impertinentan postulon?
26. Oni faris al li malbonan (aŭ nedecan) akcepton kaj faris al li ofendon.
27. Faru al mi promeson, ke vi neniam min forlasos.
28. Via ago certe faris sur ili malbonan impreson.
29. Tiu ĉi floraĵo (aŭ flora desegnaĵo) faras bonan efekton sur la teksaĵo.
30. Nenia medikamento faras efikon sur tiun ĉi malsanon.
31. Li faras sciencajn studojn pri lingvoj.
32. Ni faris subitan atakon kontraŭ (aŭ al) la malamikoj.
33. Tio faris al mi embarason (=Mi estis embarasita pro tio).
34. Kiamaniere oni povas fari diferencon inter fungoj manĝeblaj kaj nemanĝeblaj.
35. Kiel vi kuraĝis fari al mi tian honton?
36. Tiuj ĉi ŝunoj estas malvastaj (aŭ premantaj) kaj faras al mi dolorojn (aŭ al mi pinĉas la piedojn).
37. La amo ne faras apartigon inter riĉaj kaj malriĉaj.
38. Al ni estas malfacile fari diferencigon inter (la elparoloj de) r kaj l.
39. Mi bedaŭras, ke mi faras (aŭ kaŭzas) al vi multe da klopodoj.
40. Ŝia babilado faras al ni ĉagrenon (aŭ ĉagrenas nin).
41. Volu fari rimarkigojn pri niaj paroladoj.
42. Ĝi estas la fakto, kaj mi ne bezonas fari al ĝi ian kementarion.
43. Li ĉiam faradas ŝuldojn kaj faradas al la patro ĉagrenojn.
44. Elefanto faras venĝon sur tiu, kiu faris al ĝi doloron.
45. Se vi volas fari ĉirkaŭvojaĝon en la lando, ni faros por vi necesajn aranĝojn.
46. Mi el nenio faras ĉagrenon.
47. Ni faru amendon al tiu ĉi propono.
48. Dum mia eksterlanda vojaĝo Esperanto faris al mi mirindajn servojn (aŭ helpojn).
49. Mi volis fari al vi rimarkigon (aŭ vin rimarkigi), sed mi iel forgesadis.
50. Estas kompatinde, ke ŝi vane faradis al si esperon iam lin revidi.



# MIGRANTO

## III

Originale verkita de YUASA Katue

Tradukita de MATUDA Syûzi

Tamen tia sonĝo tuj ma'aperis kvazaŭ elvaporigi, kiam ili vidis la teron. Ĉu tio ĉi estas kampo?! Kulturvojoj?—tiuj ĉi ŝveloj de terbuloj kiel komplikitaj fadenoj, kvazaŭ kie talpoj ĉirkaŭfuriozis. Kaj la kavo, kie herbo kreskas kiel sovaĝejo—Ĉu tio ĉi estas semobedo?! Ĉu oni ŝercas?—Matuzirô turnis la vizaĝon al la oficisto de Oriento-kolonia Kompanio, sed nenian ŝanĝon li vidis sur tiu afektita vizaĝo, kies haroj estis zorge ordigitaj. Iya, alveninta iom malfrue, puŝetis la edzon kaj flustris al li. »Nu ni rapidu. Ĉu ni plue transiros tiun monton?« Vere nenian teron oni vidis similan al kampo ĝis la piedo de malproksima monto; estis nur monotona sovaĝa herbejo.

Je tiuj vortoj la kompania oficisto grimacis kaj montris rideton. »Tio ĉi estas, sinjorino, via *tô* (kampo).« Aŭdinte »sinjorino« ambaŭ ĉirkaŭrigardis serĉeme, Sed ili ne vidis tian homon. Baldaŭ ili ekrimarkis, ke Iya estis vokita »sinjorino« kaj pro hontiĝo ili staradis senmove kaj sen vortoj. Tiam, eble pro miskompreno, la kompania oficisto komencis maltrafe klarigi kun serioza mieno.

»*Tô* estas rizkultivejo. En koreujo oni nomas tiel por diferencigi ĝin de la ordinara kampo. Ankaŭ pri litero oni uzas kunmetitan el »akvo« kaj »kampo« ĉu vi komprenis?«

Finfine kompreninte la aferon la geedzoj tute senkuraĝigitaj genuiĝis sur la herbejon. Kaŭranta Matuzirô enpuŝis la manojn en malmolan teron kaj fosis ĝin; venis sentoj de tero, de ŝtonoj miksitaj.

—Ĉu ni venis celante tian sovaĝejon transe la maron?!—

»Eble tio ĉi taŭgus por bredado.« Apenaŭ eldirante la vortojn per neĉiama dirmaniero li staradis kun sentoj senespera kaj esploronta.

Sed de la sekvinta mateno ili ambaŭ elvenis en la kampon piedpremante la frostiĝintan teron.

Kvankam tio ĉi estas ankoraŭ kruda, post jaroj ili apartenos al ni. Tio estas pli bona ol kvereli pri malvasta tero, tiom granda kiom la frunto de kato, en naskovilaĝo—tiel pensante iom post iom ili povis regajni la esperon.

Post longa penado longaj vicoj de rektaj sulkoj estis plugitaj; starante apud la vivece elkreskintaj spinoj de tritiko, kaj vidante la etajn rizfoliojn ondantajn kiel lanugoj en maja vento, foje kaj foje ili rakontadis la edzinon



pri la vivplano de 25 jaroj, per kiuj ili povos alproprigi la teron, kun senlima plezuro, kian ili neniam sentis en la vilaĝo, kun tia vizaĝo plena de memfido kaj espero, kvazaŭ la aferoj ĉiam irus sen baroj.

»Laŭ tiu ĉi kalkulo post tri jaroj ni povos aĉeti bovon, post kvin jaroj porkon, kaj post dek jaroj...«

Tiam Iya, kiu aŭskultadis ravita al lia parolado, interrompis lin kaj diris,

»Ion alian mi tuj deziras havi.«

»Kio?«

»Mi ne diros; Vi ridus pri mi...«

»Diru!«, »Diru do!«, »Ĉu ĝi multekostas?« Ŝi skuis la kapon kaj diris, ke ŝi deziras havi sciuron, hundon kaj katon.

»Tiajn aĵojn!...«, Matuzirô ekridis, sed ridante li sentis ion, kio estas ne forridebla. Kvankam ŝi diras nenion, ŝi sentas fortan solecon... li pensis kaj sentis kompaton al ŝi.

Oni diras, ke en la suda Koreujo multe da migrantoj jam enloĝiĝis kaj tie kaj ĉi tie ili faras komunumon konsistantan nur el migrantoj, sed en la Nordo Matuzirô kaj aliaj estis preskaŭ la unopaj. Ankaŭ en tiu ĉi regiono homoj el Hokuriku aŭ el Tôhoku transloĝiĝis, tamen ili loĝas dise en vasta teritorio.

Malantaŭa monto kovrita de herbo, sur kiu kreskas neniun arbo, eble pro tio, ke la primitivuloj\* forbruligis ĝin; arbaro de pinoj, abioj kaj poploj ĉe la montopiedo, kiuj dense kreskas kvazaŭ kompensi la senarban monton; kaj antaŭe de la domo etendiĝo de vastega Kankô ebenaĵo. En la nokto strigoj—kiu ankaŭ loĝas ĉi tie—ululis per terura voĉo kiu kvazaŭ elskuas homan koron. En la unua nokto, kiam ili aŭdis ĝian ululadon ili ambaŭ ne povis dormi pro timo kaj maltrankvilo.

»Ho-hoo...« kiam el unu angulo de la ĉielo sonas terura ululado, kiel kolosa monstro kraĉtusas, ili sentis sin timigitaj kaj la koro ondas pro ia premanta sento, kaj poste kvazaŭ doni al ĝi finalon venas voĉo »Norisutoke«. Aŭdinte tion fine ili povis trankviliĝi.

»Ah, tute sama kun tiu de mia vilaĝo, sed nekompareble pli timiga...«

Ree sonis ululado en sufoka kvieteco kaj ĝi pikis ilian koron.

Tamen baldaŭ ili povis alkutimiĝi al ĝi, kaj post kelkaj monatoj ĝi fariĝis tiel intima kiel familiano, ke Iya kutimis esprimi pri ĝi dirante »Ho ree stricjo ekkrias!«

Sed al sovaĝa hundo ili povis neniel alkutimiĝi. Nur aŭdinte ĝian



voĉon oni priimagis ĝian sangumitan faŭkon, aŭ ties akrajn dentojn. Kvazaŭ vento vintra trablovanta frostan arbaron, aŭ muĝanta maro, aŭ lamentado ĉe tombejo, per diversaj tonoj ĝi timige bojadis en fora malproksimeco.

En vintro sovaĝaj hundoj ofte aperis el la monto kaj atakis la domojn. Ili ne venis en amaso, sed venis aparte, kaj tial ili ne kaŭzis tiel grandan domaĝon. Ofte domestikaj hundoj, kokoj aŭ porkoj estis atakitaj. Kiam aŭdiĝas iliaj pasantaj sonoj la geedzoj Matuzirô, loĝantaj en senprotekta domaĉo, devis gardi sin kontraŭ ĝi, portante la malnovan lancon, la heredaĵo de la prapatroj, kiun ili portis kiam ili venis ĉi tien.

Sekvantan matenon ili ofte aŭdis ke la infano de tiu kaj tiu domo estis rabita.

La sovaĝaj hundoj kiam ĝi trovis eĉ malgrandan fendon de la pordo furioze ensaltis en la ĉambron frakasante la pordon, kaj portante la infanon en la buŝo tuj malaperis en mallumon.

Ĝi estis tre sagaca besto, ĝi ne celis domon, kie viroj multe estas, sed atakis nur domon, kie estas virinoj kaj infanoj.

\* **Primitivuloj** En koreujo loĝas primitiva tribo nomata *Kaden min*. Ili forbruligas la arbaron kaj tie semas kaj rikoltas. Post tri jaroj tie jam estas sensterka kaj ili transiĝas al alia loko.

\*\* **Norisutoke** Japanoj aŭdas en la voĉo de strigoj vortojn »preparu por lavado«. Oni kredas ke tiu birdo blekas tiel antaŭvespere de la serena tago.

#### IV

Tiun solecan domon de Matuzirô foje kaj foje gajigis Kawate Gisuke, kun kiu ili konatiĝis en la ŝipo. Li kutimis viziti ilin vespere surmetante mallongan mantelon kaj botojn. En la tago li iris por komerci en internaj vilaĝoj. Lavopelvo kaj bierbotelo estis liaj ĉefaj varoj. La unua estis uzata anstataŭ kara kaserolo kaj la lasta anstataŭ poto aŭ terkruĉo. Malplena bierbotelo, kiu en Japanujo kostis malpli ol duonseno, foje vendiĝis,—en tiu tempo unu ŝoo da rizo kostis sep aŭ ok senoj—per la prezo de unu kaj duono, aŭ du ŝooj da rizo.

»*Ĉotta!* (Ho bonege)..., tiel dirante ili ĉirkaŭfrotas la botelon. Mi iras kvazaŭ fari bonon, ĉu ne?«

Kaj Gisuke rakontis pri diversaj aferoj, kiujn li vidis aŭ aŭdis en intermontaj vilaĝoj, kien li iris por komerci.

—Tie loĝas primitivuloj nomataj *Kaden min*. Ili bruligas la monton kaj utiligante la cindron de arboj kulturas grenojn kaj legomojn. Sed kiam en



la tria jaro oni rikoltas malmulte, tiam ili transiras al alia praarbaro forlasante la ĝisnunan teron. Tiel ili migradas internen kaj internen en grandan arbaron. Ili transloĝiĝas je ĉiu tri-kvar jaroj, tamen ili havas loĝejon, kian oni povus nomi » domo «.

La tegmento farita el lignaj tabuloj, sur kiu oni superŝutas ŝtonojn, kaj ankaŭ *ondoro*,\* en kiu dormas unu sur alia kelkaj familioj, ekz. gepatroj, gefiloj, genevoj ktp., vere unu sur alia. Tio estas afero en malluma nokto, kaj ofte okazas tia tragikomedio, ke virino, kun kiu filo kuŝis, post kiam li iris por urini, en mateno estis edzino de nevo. Foje eĉ ne erare, sed konscie kunkuŝas filo kaj edzino de nevo, nevo kaj edzino de filo, ktp.,—tiamaniere li rakontis entuziasmege kaj elokvente kun diversaj gestoj.

»Iun fojon«, li rakontis, »mi vidis grandan montbruladon. Fajro, kiun la primitivuloj faris, treege vastiĝis ol ilia plano kaj bruligis la tutan monton sufiĉe grandan. Tian teruran aferon mi neniam vidis. Ĉirkaŭe pli ol du kilometroj de la monto fariĝis luma kiel en tago kaj oni povis vidi la montrilon de poŝhorloĝo. En ordinaraĵ tagoj ĉiu arbo aspektas dika kiel haro pro vasteco de la arbarmaro. Sed tiam mi, kiu alproksimiĝis al fajrego, estis mirigita, ĉar ĉiuj arboj, kiuj brulfalas kiel ardanta kolonoja estis dika pli ol unu metro. Estante pli ol 3, 4 cent metroj for de la fajrego, kiu ruĝigas la ĉielon, mi sentis, pro kio mi ne komprenis, tian ardan pasion, ke mi ne povis ne ĉirkaŭkuri.

En tiu tago mi ne estis gaja, ĉar nek lavopelvo nek botelo bone vendiĝis. Mi kuradis de vilaĝo al vilaĝo kvazaŭ de io obsedita.

Kiam mi estis entuziasmega, ankaŭ aĉetantoj aĉetis kvazaŭ sorĉitaj. Jam pasis dekunua, kiam mi rekonsciiĝis vendinta la tutan varon.

Kiam mi malfruiĝas mi kutimis, resti en vilaĝo, kie sin trovas noktejo, sed en tiu tago mi estis forgesinta prepari min pri tio.

Facile, per duhora irado mi atingos tiun vilaĝon—tiel pensante mi iris sur frostiĝinta montvojo. Ĉar malantaŭ mi brulas montofajrego, kiu daŭros multajn tagojn, mi ne erarus la vojon—tiel mi facile konvinkis min, sed tio estis malbona kaj mi eniris tute nekonatan vojon. Mi iris kaj iris, sed ne trovis domon. La frosto mordas la korpon kaj la stomako malplena. Mi pensis, ke mi mortus survoje. Finfine post longa irado mi hazarde trovis lumon. kiel ĝoja mi estis! Ĝuste tiam kamparanedzino venis mal-supren por aldoni hejtaĵon al la ondoro kaj pro tio tra la fendo de pordo la flamo de ondoro radiis, mi supozas.

Se tio ne okazus, mi estus trapasinta ne rimarkinte. Dio mia!...



tiel pensante pro malstreĉiĝo kaj laciĝo mi eniris la domon, nenion dirante pri detalo, kaj tuj falis en la dormon. En la nokto mi hazarde vekigis. Ŝajnis al mi, ke pluvas ekstere—ne, tio estis, la edzino estis brue urinanta en apudan urinpoton. Mi estis tute embarasita. Tiel ĝis la tagiĝo mi ne povis dormi aŭdante la familianojn urinadi. En la mateno la edzino iris por forĵeti ĝin. Ĝin forĵetinte ŝi lavis la manojn en kaldrono, kiu pendas sur la hejtejo de ondoro. Ĉu vi povas supozi, kaj kio okazis? Kiam mi vidis, ke oni kuiras la matenmanĝon per tiu varmakvo, mi estis tute konfuzita. Tamen mi toleris kaj manĝis.

Matenmanĝo—tio estis kaĉo kiel kanalkoto farita el terpomo kaj paniko, sed tiel bongusta kiel manao, eble pro tio, ke mi estis ekstreme malsata.

Je la adiaŭo ili donis al mi sakon da faruno kaj salo, dirante: Manĝu ilin survoje. Tio signifas, ke mi manĝu knedante ilin per akvo. Tiel malriĉa kamparano, kiu apenaŭ povus travivi la vintron, tiu faris al mi tiel bonkore. Tiam la unuan fojon en la vivo mi klinis la kapon kaj dankis ilin. Eĉ inter *Jobotan* (koreoj) sin trovas tiel bonkora homo, tiel pensante mi komencis vidi ilin per novaj okuloj... tiamaniere la rakontado de Gisuke ne elĉerpiĝis.

Liaj rakontoj estis tre interesaj, tamen lia parolmaniero, kiu ĉiam intermetas tian difinon por koreoj—neniel amikiĝebla, malpura, malsaĝa, ruza ktp.—ĉiam apartigante ilin de si dirante »Jobotan«, ne lasis Mataziro'n trankviliĝi.

Ĉiuj, kiujn li renkontas ĉiutage sur la kampo estis koreaj kamparanoj. Multajn tagojn li ne vidis japanojn, kiam Gisuke forestis iom longe. Povus okazi, ke oni sentas iom stranga aŭ malpura pri ili pro tio, ke iliaj kutimoj diferencas de tiuj de japano. Ekz. viŝi per bastono post fekado, aŭ meti urinpoton en varmĉambro (ondoro). Diversaj sentoj igus senti lin stranga, tamen Matuziro ne povis prepari sin kontraŭ ili aŭ antipatii kvazaŭ kontraŭ ruzaj malamikoj kiel faras Gisuke. Eble pro tio, ke li ricevis nenian malbonan trakton de najbaroj.

\* **Ondoro**—En koreujo oni bruligas la fajron sub la planko kaj varmigas la tutan ĉambron. Speciala maniero en Koreujo.

## V—XI (*La tradukinto intence forlasis*)

## XII

Post dudek jaroj mortis Matuzirô. La vilaĝanoj interkonsiliĝis lin funebri en korea maniero. Jes korea maniero, tion li estus esperanta.



Tamen kiel solena procesio ĝi estis! Kial ili funebris lin kiel nobelon?

Li ne havis grandegan meriton, nek agis heroeme, kompreneble li ne havis la sangon de korea nobelo.

Dum longa vivo kia ajn homo povas fari unu aŭ du agojn laŭdindajn por la bono de homoj, ankaŭ ĉe Matuzirô oni ne povas diri, ke li faris nenian aferon. Ekzemple li klopodis starigi la korporacion por akvokondukado kaj konstruis digon en la vilaĝo, tio estas kalkulebla en liaj meritoj. Aŭ foje li sukcesis kulturi novan specon de la akvomelono kaj alportis iom da profito al la vilaĝo.

Tamen tiaj estis bagatelaj kompare tiujn de Gisuke. Li faris ja pli grandskalajn aferojn. Li fariĝis granda riĉulo laŭ lia deziro kaj oferante la parton de sia havo li konstruis kolegion, al kiu li donis sian nomon. Aro da blankaj konstruaĵoj, kiuj enhavas mezgradajn, knabinajn kaj elementajn lernejojn kaj eĉ infangardejon, estas konstruitaj de lia monofero, kaj en tiuj modernaj institucioj knaboj kaj knabinoj lernis kaj ludis gaje. De tempo al tempo li vizitis la kolegion tordante la jam blankiĝintan lipharojn de cezara formo kaj ne palpebrumante la maldekstran falsan okulon, kiun li perdis pro la afero. Tiuokaze la devo de la lernejestroj estis elkalkuli liajn meritojn kaj ankaŭ la lernantoj tiamaniere, ke — en tiu rusjapana milito li estis vundita je la honoro ĉe maldekstra okulo kaj maldekstra vango, kaj... — ktp.

Vere li estis granda sukcesinto, kiu sola venis sen havo al Koreujo kaj elkonstruis nunan pozicion per siaj propraj manoj. Tiu ĉi ja estis vivanta modelo de la historio de sukcesintoj.

Kompare al li kiel mizera kompatinda ekzisto li estis, li Matumura Matuzirô! Por li estis senlima ĝojo, ke li povis al si proprigi la deziratan kampon en sia maljuneco. Kaj tamen eĉ tiun kampon li devis fordoni. Diversspecaj modernaj grandfabrikoj estis konstruitaj laŭ la marbordo kaj en la kamparo, kaj kompaniaj pensionoj komencis invadi ĝis lia domo.

Oni proponis, ke li transdonu sian teron por kompania pensiono, sed li obstine malkonsentis.

“Kial ĉi tiun teron fordoni, kiun mi povis proprigi post longjara penado!”, rifuzis ĉiufoje. Sed la kompanio venis al li tro ofte dirante, ke se li ne transdonus sian teron ilia plano estos tute aliformigita, kaj la pensionoj, kiuj estas rekte konstruitaj, fariĝos kurbigitaj malbonaspekte, ... aŭ, ke li transdonu la teron por la prospero de la urbo, ktp.

Fine li estis devigita vendi parton de la tero, sed en la resto, inter



# Orientaj Legendoj pri la Luno

Oono-M.

( 1 )

Pale kaj trankvile brilas la luno. Neniu nubo sin trovas en la ĉielo... Jam estas la aŭtuno, kiam la luno plej heliĝas kaj inspiras poeziojn en homan koron...

Admiri la lunon estas tradicio en Japanlando. Certe la luno estas tre adorinde bela: ĝi estas lulilo de sopiroj, trezorejo de karaj rememoroj; ĝi estas patrino de fantazio, malĝojo kaj sentimentalulo.

Eŭropanoj, kiuj kutimas je komplikaj komponadoj, eble ne povas kompreni malplenan spacon sur japana desegno. Tie estas nur desegnita sola la luno. Ĉu eŭropanoj povus kompreni la esencon de hajko: tiun plaŭdeton en dezerta lageto, kiun kaŭzis rano ensaltinta? Ke japanoj tiel admiras la lunon devas al ili iom nekompreneble. En japana literaturo oni povas facile trovi tie kaj tie priskribon pri la luno. Oni ja povas diri, ke japana literaturo estas lumigita per la luno. Jes, la esenca koloro de japana literaturo estas pala kiel la luno.

Japanoj admiras la lunon pro ĝia simpla beleco (eleganta), profunda resonado kaj senlima postsento... Japanoj scias ja vidi multe pli riĉan enhavon en ŝajne simplaj aferoj ol en komplikaj.

pensiono kaj pensiono, li ankoraŭ semadis, kulturis tritikojn aŭ rafanojn.

La figuro de Matuzirô, kiu senvorte semas, kulturas rafanojn aŭ rikoltas kukurbojn, estis tre stranga ekzisto en tiu ĉi moderna industria urbo, kiu subite ŝanĝiĝis el sovaĝa kamparo.

Sed baldaŭ li devis ankoraŭ detiri sin, ĉar ruĝa fumo de surfurita gaso, kiu leviĝas el plumba fumtubo de plumba fabriko, komencis velkigi la kulturajojn.

Li vendis la tutan kampon kaj aĉetis beletan domon per tiu mono, sed eble tiam el lia korpo jam estus perdiginta vivkapablo.

Kiam tiu ĉi nedistingita viro mortis, ĉiuj vilaĝanoj kolektiĝis ĉe lia domo kaj bedaŭris pri lia morto.

“Ah, bonega homo mortis! Ni neniam antaŭe vidis tiel bonan japanon, kaj ne povus vidi plu de nun!”

Tiel ili ornamis lian funebron per tiel pompa soleno kiel tiu de nobelo.

—(Fino)—



Inter japanoj eĉ tiuj, kiuj ignoras belajn stelojn, ankaŭ akmiras la lunon kaj promenas tra helaj lunlumoj absorvite kvazaŭ en dolĉa sonĝo. La luno estas por japanoj la plej bela en la naturo.

Kiel ĉagrene estus al japano, se li ne povus lunĝuadi. Jen estas hajko, kiun verkis Hanaŭa-Hokiiĉi, fama blindulo, en la luna nokto, la 15 an de Aŭgusto (laŭ luna kalendaro).

L'aŭtuna luno,	( <i>Hana nareba</i>
Se ĝi estus ia flor',	<i>Saŭaritemo min</i>
Mi povus palpi.	<i>Aki no cuki.</i> )

Respondo de lia edzino:

Nokte turmentas	( <i>Meigecu ŭa</i>
L'edzinon de blindulo,	<i>Zatô no cuma no</i>
Klara la luno.	<i>Naku jo kana.</i> )

La luno havas tiun belecon, kiu plej bone harmonias kun japana karaktero mankas latentia varmego kaj pompa koloro: varmego tuj disĵetiĝas en fajrerojn, koloro ensolviĝas en malhela, subtila harmonio. Io brilega tuj nebliĝas. Al japanoj plej plaĉas neluksa, paliĝanta koloro, simpla sed rafinita gusto. Estas do nature, ke japanoj trovas en lunlumoj plej bonan simbolon de sia esenco.

## ( 2 )

La luno lumas helkolore. Tra la fenestro mi vidas neklarigitan konturon de aĵoj. Neniu nuboj sin trovas en la ĉielo... Nun estas bone por rakonti kelkajn legendojn pri la luno. Jes, mi ja intencis tion fari, jam ekprenante la plumon.

Ĝoju, kiu loĝis en Seika (Ĉinujo), faris pekon studante fearton. Dio koleris, lin forpelis en la lunon. Staris tie laŭrege preskaŭ 500 Ĵo'n alta—kiun li devige hakis rekompence, sed ve, ĝi estis ensorcita; je ĉiu hako reaperas nova branĉo. Kaj li estas desegnita ĉiam haki por eterne.

Iam vivis Gei, lerta pafisto, zorge konservis eliksiron de vivo. Iun tagon lia edzino forŝtelis la eliksiron, forkuris supren en la lunon. Ŝia formo, tamen, jam estis alia pro sia peko—bufo. Doga, kiu, oni krekas, ankoraŭ vivas kun la eliksiro en la luno... estas nun alia nomo de la luno.

Pompa palaco staras en la luno. La ĉirkaŭbarilo estas el fakemojlo, se oni ĵetas lunlumon sur kloisonan gemon, tuj elfluas pura akvo, kiu mirakle reunigas maljunulon.

Iam en Hindujo interparolis tri bestoj: leporo, vulpo kaj simio. Kaj ili



fariĝis piaj, kredis Budisatvan instruon. Unu tagon Tajŝokten vizitis ilin kun intenco scii ilian konsciencon. La simio regalis al li fruktojn kaj la vulpo fiŝojn, sed la leporo bedaŭrinde havis nenion por regali. Tiu ĉi multe domaĝis tion kaj fine rostis sian korpon por lin regali. Tajŝokten estis tiel kortuŝita de la sincera gastamo, ke li desegnis sur la luno la figuron, en kiu la leporo suferis fajron: Ĉiuj kreitaĵoj por ĉiam memoru sincerecon de la leporo.

La suno kaj luno estis geedzoj. La kreinto ordonis, ke la suno estru la tagon, la luno la nokton. Oni devas fidela al la kreinto, Kaj la suno-edzino diligente laboris tage, dum la luno-edzo nokte. Ili tiel ne povis kune enlitiĝi unu apud la dua. Kial la luno ofte sin kaŝas en la nokto? Ĉar la luno ofte vizitas la edzinon kune pasigi la nokton kun ŝi.

Ie sin trovis mallaborema knabo, kiu tute ne obeis al la gepatroj. La suno koleris pri tio. Kiam la knabo nevole venis akvon ĉerpi al rivero, la suno, aliformiĝinta je salmo, etendis brakon el la rivero, lin ekkaptis kaj forprenis en la landon de l' luno. Ainoj ankoraŭ nun kredas, ke en la luno vivas homoj, idoj de la knabo.

### ( 3 )

Diablo, kiu enviis gloron de la luno, deziris mem estri la noktan mondon kiel la luno. En unu nokto la diablo proksimiĝis senlaŭte al la suno, kiu dormis profunde, ŝtelis la lum-veston.

Jen aperas sur la nokta ĉielo DU LUNOJ! Oni konsterniĝis kaj timiĝis ekstreme. Oina-kamui tuj rimarkis, ke tio devenas de la diablo, almetis arĝentan sageton al arĝenta pafarketo kaj ekpafas. Trafite! Falas mal-supren la diablo mortigita. Kaj la lumveto revenas en la manon de la suno.



## Venuso

Tooson Ŝimazaki

## 明星

島崎藤村

(藤村全集第一卷 p. 112)

E iru en maten-ĉielon,  
Farinte nin la nub' naĝanta,  
Nur tiam ni ekkonos stelon,  
Venuso ruĝe briletanta.

浮かべる雲と身をなして  
あしたの空に出でざれば  
などしるらめや明星の  
光の色のくれなるを。

Eliru sur la fluo mara,  
Farinte nin la tajd' matena,  
Nur tiam trafos nin la klara  
Venusa lumo, malĝojplena.

朝の潮<sup>ウシホ</sup>と身をなして  
流れて海に出でざれば  
などしるめや明星の  
清<sup>ス</sup>みて哀しまきらめきを。

Al kio tiel vi sopiras,  
Ke tra la pordo de ĉielo  
El malproksimo vi aliras  
Ĉe l' homan mondon, kara stelo?

なにかこひしき曉<sup>アカガシ</sup>星の  
空しき天<sup>アマ</sup>の戸を出でて  
深くも遠きほとりより  
人の世近く來たるとは。

Verdeta maten-mar' serenas,  
Jen funde ŝtonoj blankvizaĝas,  
Per ili en stellum' divenas  
Ni, kiom la mateno aĝas.

潮の朝のあさみどり  
水底<sup>ミナソコ</sup>深き白石を  
星の光に透かし見て  
朝の齡<sup>ヨヘビ</sup>を數ふべし。

Ekpepas birdoj, tuta tero  
El nokta sonĝo nun vekigaŝ,  
Aŭroro roza en l' ĉielo  
Trenigaŝ bele, jen tagigaŝ.

野の鳥ぞ啼く山河も  
ゆふべの夢をさめいでて  
細く柵引くしののめの  
姿をうつす朝ぼらけ。

Ne mankas nokte la ario,  
Matene ankaŭ la matena,  
Sed kordoj el la stelradio  
Silentas sur la lir' matena.

小<sup>コ</sup>夜には小夜のしらべあり  
朝には朝の音<sup>ネ</sup>もあれど  
星の光の絲の緒に  
あしたの琴は静なり。

En novmaten' ankoraŭ juna  
Brilantajn stelojn benu Muzo,  
Kaj al la brilo pleje juna  
Bonvolu nomi „la Venuso.“

まだうら若き朝の空  
きらめきわたる星のうな  
いといと若き光をば  
名<sup>ナ</sup>けましかば明星と。



# 日本エスペラント大會規約

## 起草委員會に與へる公開狀

神戸エスペラント會

——編輯部ヨリ——

神戸エスペラント協會が昨年、「日本エスペラント大會規約」の草案を、全國同志に提示したことは、諸君のあまねく知られてをるところである。同協會は、會長月本喜多治氏以下委員、和田俊次、中村智、坂内正二、前田健一、宮本新治、橋詰直英の諸氏の署名のもとに、「日本エスペラント大會規約ニ就イテ」「日本エスペラント大會規約案(神戸)」「同上案ノ説明(神戸)」を作製した、その努力は深く敬意を表さねばならない。今回昭和十二年五月二十日附で、下記の公開狀を學會宛送付され、R.O. 誌上に掲載方を希望して來られたので、それをここに發表すると同時に原案も加へた。「案ノ説明」及び「規約ニ就イテ」は省略した。

1. 本會ハ日本エスペラント大會ノ存在意義ヲ解シ、下記ノ事項ニ重點ヲ置クベキモノトナシ、從來微力ヲ省ミズ之ニ參加畫策セルモノナル旨ヲ銘記サレタシ
  - A. 大會ハ日本全エスペランチストノ總意ヲ顯現スル唯一ノ機關ナリ
  - B. 大會ハ日本全エスペランチストノ年一回ノ大祝祭ナリ
  - C. 大會ハ日本全エスペラント運動ノ最高ノ合議機關ナリ
2. 爾來諸家ノ意見ヲ徵スルニ吾人ノ見解ト大差無キガ如シ、宜ナル哉長崎大會ヲ機ニ上記各項ヲ根幹トスル大會規約ヲ制定シ、我エスペラント運動ヲシテ確固タル軌條ニ上ラシメントスル目的ヲ以テ起草委員ノ選定ヲ見タルモノナリ
3. 固ヨリ起草委員諸賢ノ間ニ於テハ、諸種ノ見地ヨリシテ深遠ナル研究進捗セルアランモ、其成果タル規約ニシテ單ニ過去ノ大會行事ヨリ歸納シ之ヲ成文化シタルノミニテ、何等將來ノエスペラント運動ヲ指導スベキ劃期的飛躍的因子ヲ含マザルモノタラバ、要スルニ無用ノモノニシテ吾人ノ採ラザル所ナリ
4. 顧ミルニ長崎大會ヨリ數年ヲ閱ス、其間起草委員諸賢ヨリ吾人エスペラント大衆ニ與ヘタルモノハ何カ、

曰ク

Raporto de la speciala komisiono de Kongresa Regularo

Efektivaj laboroj jam plenumitaj: Pri nia laborado super la regularo por la kun-sidoj de la Kongreso; la ciperoj de niaj korespondaĵoj:—La cirkuleroj 8, la leteroj de sekretario 23, la leteroj de komisionanoj 45. (O. P. XXIII-A Kongreso Nagaja 1935 p. 11)

S-ro S. Ŝindo (Osaka) raportios ke la komisoiono regule korespondas inter si kaj ne rapide sed tute serioze trastudas la regularon. (O. P. XXIV-A kongreso Sapporo 1936 p. 7)

以上ヨリ吾人ハ何ヲ判斷シ得ルカ、又規約ノ制定ヲ見ルハ今後幾年ヲ待ツベシ

5. 吾人ハ大會規約ニ就キ爾來深キ關心ヲ有シ、前寄附行爲其他ノ大綱ニ關シテハ充分ニ自信ヲ有スルニ至リタルヲ以テ、徒ラニ委員諸賢ニ一任シ以テ之ニ關與セザルハ無責任ナリト



- 觀ジ、昨夏札幌大會直前、試案ヲ江湖ニ發表セリ、末節ニ至リテハ尙推敲改削ノ餘地アラ  
ンモ、同案ハ直チニ諸賢ノ協賛ヲ得テ之ヲ施行運行ストモ差支ヘ無シト信ズ
6. 同案ハ昨札幌大會以前ニ完了セルモ、之ヲ同大會ニ提案セザリシ所以ノモノハ、案自體、  
重且大ニシテ其及ぼストコロ甚ダ鮮少ナラザルニ、唐突之ヲ提案シ以テ議事ヲ困惑セシム  
ルヲ虞レタルト一方同大會ノ席上ニ於テ、起草委員ヨリ具體案ノ提示アルベキヲ豫想シ以  
テ之ニ敬意ヲ表シ散テセザリシナリ
7. 然ルニ同問題ノ經過ハ上記ノ如シ、依ツテ本會ハ今年度大會ニハ要スレバ敢然起ツテ同試  
案ヲ提議スベシ、同案ニ指示セル重要試案ノ發表法ヨリスルモ大會直前ノ發表ハ不可ナリ、  
斯クハ今期大會迄充分ノ期間アル今日公開狀ヲ發表スル所以ナリ
8. 曩ニ本會同案ヲ發表スルヤ、既ニ相當ノ反響アリ改造案ヲ寄セラル、アリ全的承認ヲ披瀝  
サル、アリ前寄附行爲採擇ノ上ニ於テ大會ヲ招請スルノ意思ヲ有スト傳ヘ來タル向アリ
9. 事態斯クノ如シ、規約法定ヲ見ズシテ何人ガ次期大分ヲ招請スルヤ
10. 吾人ヲシテ率直ニ云ハシムレバ、起草委員會ハ果シテ其具體案發表ノ自信ヲ有スルヤ否ヤ、  
吾人ノ常識ヲ以テシテハ其研究期間餘リニ長キニ失ス、起草委員會ハ單ナル研究機關ニ非  
ズシテ全エスペランチストノ要望ニ起チ具體案作成ノ喫緊事務ニ直面スルモノニハ非ズ  
ヤ、萬一諸賢ニシテ具體案作成ノ自信無クンバ、速カニ神戸ノ試案ヲ支持シ以テ之ヲ改良  
セヨ

以上ニ對シ、起草委員諸賢ノ明快ナル意志表示ヲ望ム

(付記) 尙神戸案ニ對シテハ諸團體及學會々員諸賢ノ忌憚ナキ御批判且速カナル御寄書  
ヲ待ツ

## 日本エスペラント大會規約案 (神戸)

### 第一章 總 則

- 第 一 條 本大會ハ日本エスペラント大會  
及 JAPANA ESPERANTISTA KON-  
GRESO ト併稱ス
- 第 二 條 本大會ハ日本エスペランチスト  
ノ總意ニヨリ之ヲ開催ス
- 第 三 條 本大會ハ國際補助語エスペラン  
トノ普及研究實用ノ爲畫策協議スルト共  
ニ本大會ノ催事ヲシテ直接全國的宣傳ニ  
效果的ナラシメ兼ネテ參加者一同ノ親睦  
ヲ計リ且祭事トシテノ價值アラシム
- 第 四 條 本大會ハ年一回之ヲ開催ス
- 第 五 條 本大會ハ日本全土ヲ適當ニ區分  
シ同一區内ニ於テハ二ケ年連續シテ開催  
スルコトヲ得ス  
但特別ノ事情アル場合ハ此限りニ非ス  
暫定區分  
一、北海道、樺太 二、東北 三、關東  
四、東京 五、北陸信越 六、東海 七、

- 近畿 八、中國 九、四國 一〇、九州  
一一、臺灣、南洋 一二、朝鮮、關東州
- 第 六 條 本大會ハ適當ナル機關ヲ選定シ  
内外エスペラント關係事項ニ付日本全エ  
スペラント機構ノ代表機關タル事ヲ委囑  
ス
- 第 七 條 本大會ノ費用ハ前寄附金、隨時  
寄附、參加費、利息及雜收入ヲ以テ之ニ  
充ツ

### 第二章 大會ノ招請

- 第 八 條 次期大會招請希望地ハ大略ノ計  
畫及豫算案其他ヲ付シ大會ニ議案トシテ  
提出スベシ
- 第 九 條 次期大會開催地ノ選定ニ付即決  
シ難キ場合ハ招請資格地代表其決定委員  
トナル
- 第 十 條 大會招請資格地トハ左ノ各號ニ  
該當スル地ヲ謂フ  
一、過去ニ於テ大會ヲ開催シタル地及現



開催地

二、將來ニ於テ大會招請ノ意思ヲ有シー  
市ヲ中心ニ二十名以上ノ大會準備委  
員ヲ有スル地

第十一條 前條第二號ノ資格地タラントス  
ルモノハ所屬會ヲ明示セル代表者及準備  
委員ノ名簿ヲ當期大會ニ提出スヘシ

第十二條 大會招請希望地ハ其中心トナル  
一市名ヲ冠シテ招請地呼稱トナスヘシ  
即チ地方會、聯盟、特種團體ハ其支持者  
トナリ得ルモ自己ノ名ニ於テ大會ヲ招請  
スル事ヲ得ス

### 第三章 大會協議會

第十三條 大會參加者ハ協議會ニ於テ齊シ  
ク發言權ヲ有ス

第十四條 議案ハ當該大會準備委員マテ大  
會開催ニケ月以前ニ提出スルヲ要ス

第十五條 協議事項ノ議決權ハ有議決權代  
表之ヲ有ス

第十六條 有議決權代表トハ前寄附金五口  
以上ヲ納付シタル地方會、聯盟及特種團  
體ヨリ派遣セラレタル代表ヲ謂フ

第十七條 大會規約ヲ變更セントスル時ハ  
十個以上ノ團體連名ヲ以テ議案トシテ提  
出スヘシ

第十八條 大會ノ決議ハ有議決權代表ノ二  
分ノ一以上ノ同意ヲ要ス

但大會規約ノ變更其他重要ナル議案ノ決  
議ハ三分ノ二以上ノ同意ヲ要ス

第十九條 議決權ノ行使ハ委任狀ヲ以テ行  
フ事ヲ得

但受任者ハ有議決權代表タル事ヲ要ス

### 第四章 代表機關

第二十條 代表機關ノ選定ハ毎大會之ヲ行  
フ

第二十一條 代表機關ノ選定ハ大會協議會ニ  
於テ之ヲ行ヒ其效力ハ其決定ノ時ニ始マ  
ル

第二十二條 代表機關ハ大會ノ決議案及關係  
會計ヲ記錄整理シ次期大會マテ決議案實  
行ノ中心機關タルヘシ

第二十三條 代表機關ハ決議事項中自己ノ能  
力ヲ以テ實行ニ堪ヘスト思惟スル件ニツ  
イテハ大會開催期間中又ハ大會開催後二  
ケ月以内ニ自己ノ機關紙上ニ發表シテ之  
ヲ拒絕スル事ヲ得

第二十四條 代表機關ハ大會協議會終了後大

會開催期間中ニ於テ自己ノ會務遂行ノ爲  
會合スル事ヲ得

### 第五章 前寄附金

第二十五條 前寄附金トハ次年度大會ノ爲ニ  
釀出スル寄附金ヲ謂フ

第二十六條 前寄附金應募個體ハ地方會、聯  
盟、特種團體及個人有志トス

第二十七條 前寄附金ハ一口金壹圓也トシー  
個體數口ノ應募ヲ妨ケス

第二十八條 前寄附金ハ成ルヘク地方會等ニ  
テ取纏メ當期大會開催四ケ月以前ニ代表  
機關ニ送附スルヲ要ス

第二十九條 代表機關ハ前寄附金ニ關シ當期  
大會開催三ケ月以前ニ其機關紙上ニ公告  
スヘシ

### 第六章 大會準備委員會

第三十條 大會準備委員會ハ大會開催三ケ  
月以前ニ代表機關ヨリ前年度募集ニ係ル  
前寄附金及寄附者名簿ヲ受取ルヘシ

第三十一條 大會準備委員會ハ前寄附者一個  
體ニ付一組宛ノ大會參加招待票ヲ送附ス  
ヘシ

第三十二條 大會準備委員會ハ參加申込者中  
大會參加ヲ不適當ト認ムルモノニ對シテ  
ハ決議ヲ以テ之ヲ拒否スル事ヲ得

但被拒否者前寄附者ナル場合ハ既納ノ寄  
附金ハ之ヲ返還シ招待票ヲ送附セザルモ  
ノトス

第三十三條 大會準備委員會ハ招待票ヲ有セ  
サル參加者ヨリ適宜參加費ヲ徵收スル事  
ヲ得。

第三十四條 大會準備委員會ハ隨時寄附ヲ受  
納スル事ヲ得

第三十五條 大會準備委員會ハ大會開催一ケ  
月以前ニ提案事項ヲ代表機關機關紙上ニ  
公告スヘシ

第三十六條 大會準備委員會ハ大會終了後六  
ケ月以内ニ代表機關機關紙上ニ大會々計  
報告ヲ含ム調書ヲ發表スヘシ

第三十七條 大會收支決算ノ結果餘剩金ヲ生  
シタル場合ハ大會準備委員會ニ於テ適宜  
處理スル事ヲ得

但其處理方法及理由ハ之ヲ調書中ニ明示  
スヘシ

以上



## 新 刊 紹 介

## BIBLIOGRAFIO

Senditajn po 2 ni recenzas  
Unuope ricevitaĵ estas nur menciataj

- ◎ 目下現品を取寄中のもの  
■ 將來取寄せる見込のもの  
▲ 目下學會に在庫中のもの  
★ 取次がぬもの及び非賣品

◎ **Oficiala Vortaro de Esperanto.** S. GRENKAMP, 10½×14 cm. 249 p. 1937. Eld. ĉe la aŭtoro, Paris. Prezo: 20 fr. fr. 1 dol.

SAT, Plena Vortaro がでてから、Kabe の辭書を顧みる人がすくなくなつたが、しかし精選された vortoj のみを持つこれをポケット形にしたら便利だがなと思つていた。本書わまさにこんな希望を満してくれたものだ、小さな活字で、薄い紙で、手帳式にコハゼで閉じるようになつてゐる。Oficialaj vortoj のみに僅かの neoficialaj (genro, histo, metaloido, nito, organika) を加えて、Esp. で定義を與えたもの。Ekzemploj も derivaĵoj も kunmetaĵoj もない。定義わ科學的でなく實用的だが、SAT よりもむしろ簡單で要領をえているものが多い。Komika なのに profesoro (f) Ĉiu fuŝulo instruanta esperanton.) 忘れてならないのわ定義わ Grenkamp の手になつた privata なものであること、けしからんのわ誤植が僅かだがあること、特にみだし語の framosono (正 -a-), septelo (正 -e-), 讀書作文にわ SAT のを持つておれば、本書わ不必要だが、本書と新撰エス和とを對照して電車の中でも單語を覚えたらよいだらう。oficialaj vortoj くらいわせめて一度わ全部定義を讀んでおくべきだ。ただ繪がないので品物や動植物なんかが解りにくい、繪入小百科辭典の出版が望しい。

(KAWASAKI-N.)

■ **Traduko de la Provteko en la Gvidlibro** proponita de Profesoro G. Waringhien, Prezidanto de F.E.I. 1937. 12×18 cm. 61 p. Franca Esperanto-Instituto, Paris. Prezo: broŝ. 4.50 fr. fr.

R. O., Marto 1936 に紹介したフランスでの esp.-isto の資格試験準備書である Gvidlibro 中の Esp.-tekstoj (試験問題)をフランス語に譯して、それに氣のきいた語學的の註を加えたもの。Gvidlibro 中には Z. 以下各種の (文藝物、論文わもとより AELA の廣告文まである)短文が集つてゐるから、試験準備でなくとも、勉強しておいてよい本だが、フランス語を知つてゐる人にわこの traduko と komentario が非常に参考になるだらうし、逆にフランス文を Esp. 譯してみるものが Esp. の作文が養成に役立つであらう。日本でわまだこんな試験制度のないのが残念。

(KAWASAKI-N.)

## IEL へ入會せよ 先着入會申込者 (5 名限り) 年鑑即時配布

MJ (年鑑の配布を受ける) .....	2 圓 50 錢
MA (年鑑, 月刊 Esp. Internacio を受ける) .....	6 圓
MAH (年鑑, 週刊 Horold de Esp. を受ける) .....	16 圓
MS (年鑑 Esp. Internacio, Premio を受ける) .....	15 圓

入會資格: 學會正會員, 贊助會員, 特別會員, 終身會員に限る

入會手續: 送金と同時に會員別, 住所氏名 (漢字とローマ字) 通知のこと



# 全 國 各 地 報 道

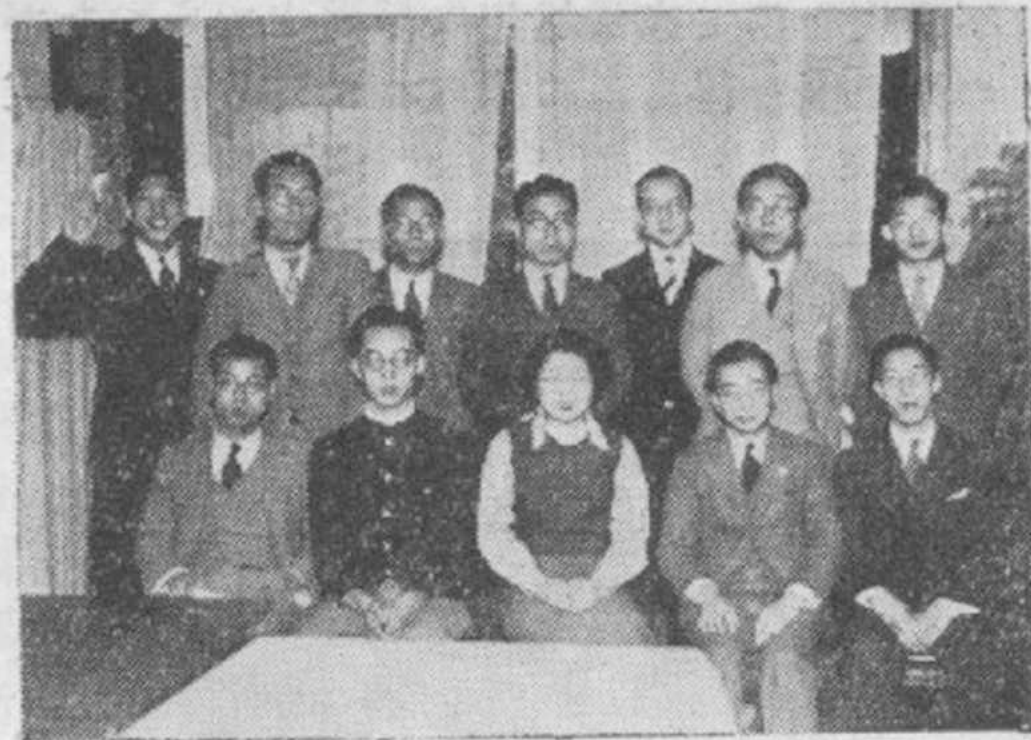
投稿注意:

1. 日本文にて・なるべくハガキで・迅速に・簡単に。
2. 締切大體毎月15日(15日以後到着のものものせることあり)。
3. 地方會誌を以て報道に代ふるをえず。
4. 寫眞は裏に必ず何の寫眞かといふ説明記入の事。  
寫眞は返送せず資料として保存す。

**東京** ★**浅草エス會**——本會第二回總會を5月3日19時より本郷森永階上に開催。晚餐後石黒喜久雄司會のもとに開會。渡部より前年度會務の總體的報告に次いで會計(仲野氏病氣缺席のため石黒(捷)代理す)調査(渡部、松本)其他各部員の報告あり、續いて多羅尾氏並に新會員の挨拶。役員改選、今年度計畫に就いては調査部事項、運動後援會及び第廿五回大會に關する事項と協議を重ね、最後に記念撮影をなし22時散會する。

## 第2年度改選役員

會計部(石黒捷三郎) 連絡部(鈴木辰雄)  
圖書部(佐藤 亘) 記録部(高見 宏)  
例會部(石黒喜久雄) 教育部(上田嘉三郎)  
調査部(渡部、松本、笹原、高見、石黒(捷))

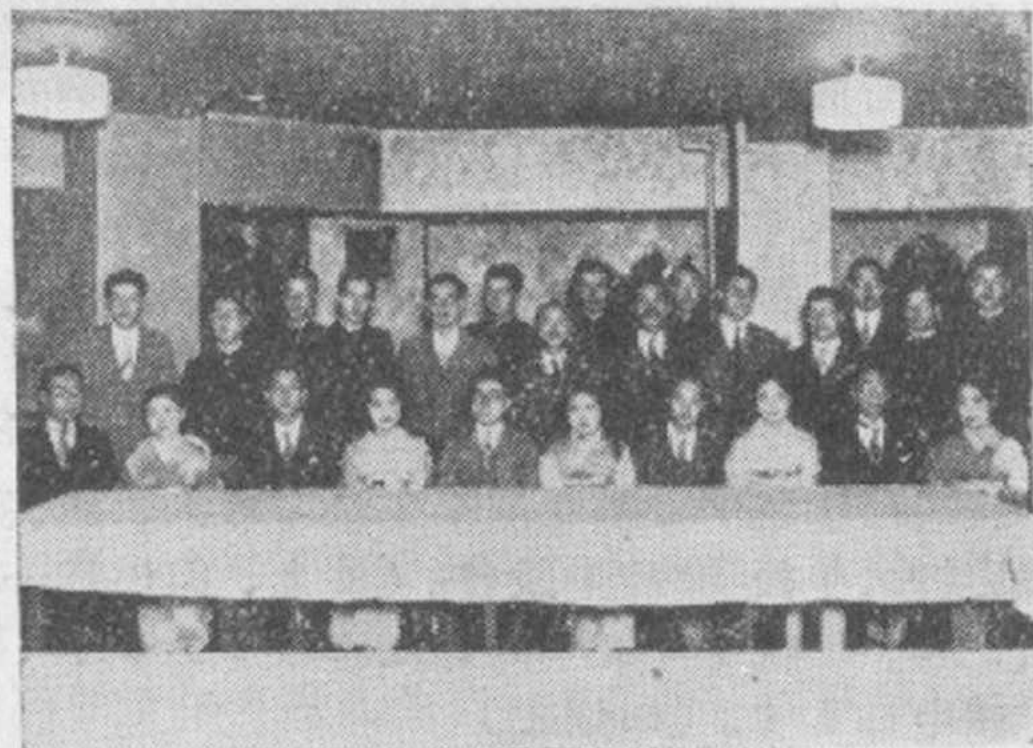


浅草エス會第二回總會

★**慶應義塾醫學部エス會**——5月20日新學年初の學内例會を午後6時半より信濃町本學内三四學年會館食堂にて開會、望月教授は風邪にて缺席されしも川上助教授先輩學生8名出席新會員神經科教室宮城音彌氏紹介其他今學年豫算計畫を協議し10時散會。

★**縁友會會員結婚祝賀會**——5月25日(火)。昨年末から今春にかけて、會員中結婚された同志夫妻五組を迎へて、總會をかね、祝賀會を、蠶絲會館グリルで開く。岩下、川俣、菅

野、安村、鶴田の各夫妻、梅地教授、栗山先生、三上先生、佐々城佑氏を始め出席者約30名。委員の挨拶、上田氏のエス語で祝賀の辭。諸先生の挨拶。久保君の「自由民権と婦人」の講演あり、現在の婦人の地位の低いことを輕蔑することは、人民一般を輕蔑することであることを論ずる。最後に gastoj の挨拶があつて會を閉じた。



縁友會々員結婚祝賀會

★**東大醫科エスクラ**——5月館野に大石氣象臺長を訪問。お手作りの苺のうまかつたこと。今毎週一回清新な各雜誌及新聞からの材料で講習を繼續30名位。尙、今夏山中湖畔で夏季聚落を開催の豫定。7月11日から5日間。



東大醫科エスクラブ館野氣象臺訪問

★**早大エス會**——6月2日15時よりローマ字會との座談會を開く。松下氏より日本式ローマ字の話あり次いで本會代表小久保氏のエスペラントに關する説明あり終つて色々討論し合ひ結局エス運動とローマ字運動とは相對立するものに非ず、言語合理化運動の共通の道を進むと言ふ事に意見の一致を見、盛大にして有意義な會を閉じた。尙會員數に於て絶對多數のローマ字會員の方が來會者少く幾分活氣を失つてゐた事は残念であつた。初等講習



は相變らず續けてゐる。夏休みまでに文法を一通り終へるつもり。機關誌の方は今の所一寸見込がない、目下對策を考へてゐる。

★東京藥學エスペ란チスト懇話會 (TEFA) —6月9日午後7時より春季例會を新富町北京料理清豐園に於て華々しく開催。出席者三雲、山田(武)、福富、前田(勤)、前田(美)、福田、高橋、伊藤、上田、山田(貞)、田畑の11名。晚餐の後幹事の挨拶あり、藥學文範原稿締切を發表、次で理研の前田勤氏「科學とエスペラント」なる興味深き講演あり、終つて議事に入り、藥學文範編輯委員を福島氏より指命、伊藤、山田(貞)、田畑の三氏に委嘱、秋季大會迄に刊行する事に決定。大會分科會に於けるアランヂヤントは三雲、福富、山田(武)氏に委嘱する事を満場一致で可決、談笑盛會裡に午後10時半散會。(席上、山田武一氏より、三益サイダーの寄贈にあづかり厚く御禮申します。(田畑記))

横濱 ★學會横濱支部——第7回總會、馬車道喜久屋フルーツバーラーにて6月3日16名。各部報告後新委員の選任を行ひ運動方針等につき協議、木曜例會 (Verda Jupitero) は都合により馬車道喜久屋フルーツバーラーで行ふ事とする。

★木曜例會 (Verda Jupitero)——毎木19時半より馬車道喜久屋フルーツバーラーにて輪讀及會話、用書は Al Tor nto.

★Amikino——Marta の輪讀を續けてゐる。

★YMCA-Grupo——毎火金兩日19時よりクラブ室にて輪讀及會話を續ける、用書は Ivan a Malsagulo.

盛岡 ★盛岡エス會——岩本氏エスペラント捷徑によつて數人の養成に努力。MER 創立當時の會員を完全に失つてしまつたけれど、新しい MER が新緑の中に育てられやうとしてゐます。◇5月18日、大川氏愈々東京へ出發、暫くのお別れ。◇6月4日(金)仙臺 H. K. にてお馴染の菊澤秀生氏來盛、ささやかなる歡迎會を持つ。◇6月16日(水)MER 第二回會話會を川徳食堂にて開催、在京の MER-anoj も手紙をもつて參加、壯たり。加茂大先輩、長官歡迎會の光榮を拋棄新人 MER のために參加指導さる。

青森 ★學會青森支部——◇組織の機運愈々熟した當支部では6月15日月例會に於て栗田氏草案になる會則を相談、全員一致賛成、役員及事業計畫の決定を見茲に青森エス會の創立を遂げた。會長葛西、副會長神、大山、幹事栗田、葛西、森谷、横岡、關、齊

藤、山邊、(學生)成田、齊藤、蛇穴、(婦人)萬西、秋元、北川、三浦、菊池。組織された總務(庶務、會計、外事、圖書)、企劃(教育、編纂、宣傳、集會)の仕事各係分擔して遂行する。◇一般大衆、學校、名士を訪問等常に宣傳に勉めてゐるが會の創立を紙上へ發表し一層の飛躍を決議した。商業、市立高女には稍々効を奏しつつあり。元縣立病院副院長眼科久保木博士が遂に吾等の良き Samideano として研究に着手されたことは近來の快事である。

札幌 ★札幌エス會——◇5月16日例會、出席7名、午後9時7分發にて退札する小口氏を見送る、歸途藤本氏送別の Tekunsido を森永に持つ。◇5月21日、札幌エス會の有志と共に藤本氏送別會を開く。◇5月22日藤本氏任地朝鮮へ向け出發。◇5月26日例會、出席5名。◇6月2日、9日休會。◇6月16日例會、出席3名。

★札幌會話會——◇6月8日青木氏(東京)を迎へて臨時會話會を森永に持つ、出席9名、◇6月11日出席6名。

帶廣 ★帶廣エス會——5月30日、今回當會の黒澤政子嬢は御結婚のため渡滿されることになつたのでその送別會を千秋庵三階に催した尙同嬢は6月中旬御出發の豫定。在京學會に在つて活躍された原田三馬氏は不幸病を得て來道旭川に靜養中であつたがこの程小康を得當地に來られた當分帶在豫定の由。



帶廣支部 黒澤嬢送別會

名古屋 ★名古屋エス會——◇5月17日19時半鐵砲町長圓寺に於てバンヒンテ、山田兩氏の小型映畫の會を催し出席者23名、内同志15名、◇5月31日金澤より白木氏宛にアメリカの國際親善レコード到着に付き輪讀會の後觀賞、此レコードに就てわ記事を名古屋新聞に送り(6月11日朝刊に載



る) 6月7日再び觀賞後京都に送る。

# ★バン・ヒンテ夫妻と名古屋の同志——◇同志

バン・ヒンテ氏夫妻は 4月23日午前、東區池下町愛知縣聾啞學校に於て同校生徒の爲めオランダ語とエス語で、講演し山田弘氏通譯す。

◇5月中旬愛知縣盲學校に於て生徒の爲め「心眼の尊い事」に就きエスペラントで講演、同校教諭通譯、◇4月22日夜、中區瓦町の

キリスト教青年館でヒンテ氏蘭領印度の映畫と講演會を英學生の爲めに催し國際平和とエ

スペラントに就ても宣傳、白木欽松氏等通譯、◇5月23日朝バン・ヒンテ夫妻わ縣立熱田中

學で平和運動に就きエス語で講演、白木氏通譯。◇同日午後わ名古屋エス界の重鎮由比氏

の招宴に列席、後由比氏に伴われ岐阜エス會を訪問し夜わ長良川の鵜飼見物。◇5月25日

白木氏に伴われ午前一宮エス會訪問と織物工場參觀、午後桑名に北勢エス聯盟を訪問して

觀迎を受ける。◇5月28日14時より東區高岳小學校講堂に於て名古屋母の會々員の爲め

に「愛わ天から與えられた人類義務の遂行なり」の演題でエス語講演をなし山田弘氏通譯

す。◇5月29日夜、中區西川端町名販社階上に於て J. E. I. 名古屋支部主催のバン・ヒン

テ氏夫妻送別茶話會を開催、由比氏の開會の挨拶、ヒンテ夫人の感謝の辭、續いてバン・ヒ

ンテ氏も日本に來てから聞き覺えに習得したエスペラントで、「吾々平和運動者にとつてエ

スペラントが如何に大切であるかを知つた、私わ近い中に立派なエスペラントになり世界

の平和運動に盡すと同時にエス運動にも大いに盡すことを誓ふ」と述べて拍手を受ける、

色々な餘興、エス歌獨唱、エス・レコードの演奏ヒンテ氏の小型映畫(蘭領印度のもの及

日本で撮したもの)等あつて、記念撮影の後、西田英夫氏の「大阪の同志の通信に依て edzo

Hinte わ吾々の同志でわなないと思つてゐた所、今立派なエス語を聞いて驚いた云々」の

閉會の辭で 22時半散會、出席者わ約 25名(寫眞参照)。◇5月30日夜バン・ヒンテ夫妻

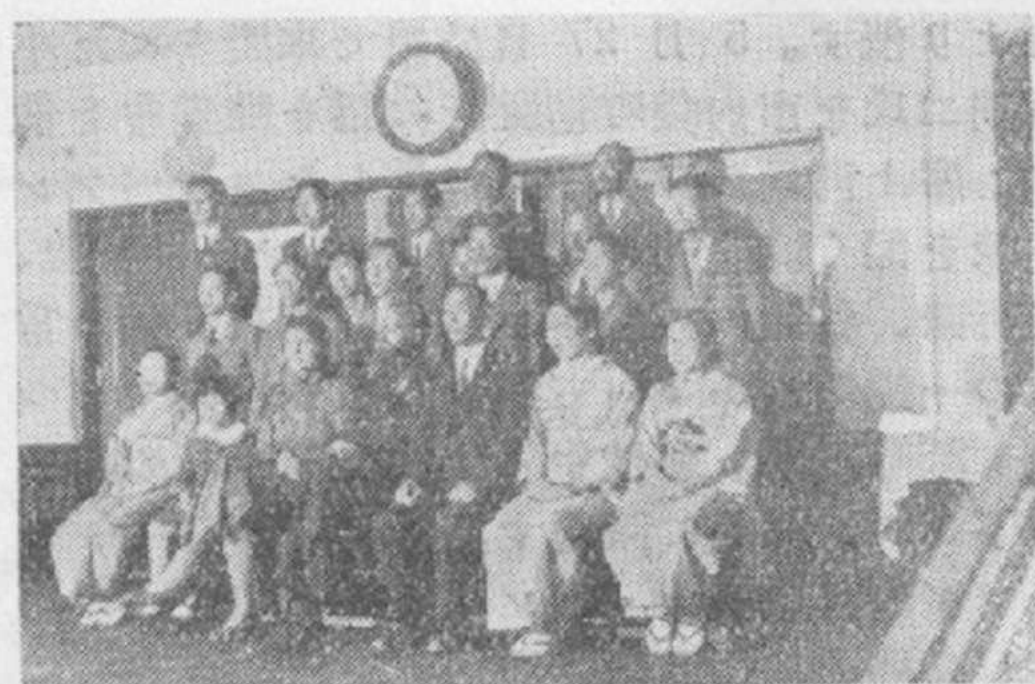
わ名古屋滞在中世話になつた人々 30名餘りを萬平ホテルに招き訣別の宴を開き、晚餐後

夫妻の小型映畫を供覽した。◇6月4日14時25分名古屋驛發の特急ツバメにて西下、神戸、

シベリヤ經由にて故國オランダに向つた。◇尙バン・ヒンテ夫妻の希望で修養道德雜誌を出

してゐる金剛石社からオランダ平和協會長兼母の會々長フオン・ヒールト伯夫妻宛長文の

メツセンジを送ることになり、山田弘氏のエス語譯文を添えて發送した。



バン、ヒンテ夫妻送別會

## 岐阜

★岐阜エス會——5月13日滋賀縣

の同志山本佐三氏來訪、板橋、柳原、坪内出席晚餐會を催した。5月23日蘭領印

度の同志バン・ヒンテ氏夫妻名古屋エス會の由比氏と共に來岐、渥美岐阜高農教授始め本

會々員それに京都の同志木村金松氏等綠星旗を打振り乍ら迎える市内見物後一同綠星旗に

飾られた遊船に乘込み鵜飼見物。花火、エス歌合唱等に打興じ楽しいひと時を過し同夜

10時30分一同驛まで見送つて散會。

## 大阪

★大阪外語エス會——5月31日より土、日曜日を除き毎日晝休の時間

を利用して初等講習を行ふ。參加者 28名、用書は短期講習書。最後まで頑張りし者 3名

のみ。然し本年西語部一年へ府志重村敏夫君を迎へ一同元氣旺盛。

★大阪エス會——豫告通の通り毎火曜日例會開催。Privat: "Historio de L. E." を研究。

6月8日東京民館に於て進藤氏の講演。"L. E. L. に就いでと言ふ題目の九で、U. R. A.

の發生よりの歴史を述べ、其と I. E. L. との關係並に I. E. L. が其に代つて internacia と

organo なるに至つた経緯と理由を解説された。6月10日 Nederlandanoj J. Van. Hinte

夫妻來阪。ヒク氏と進藤氏及び大阪の小學校の見學を案内された。

★O. E. S. 豫告——毎週火曜日於東市民館。Privat: "Historio de Lingvo Esperanto." 研

究。第三火曜 "Jrapezo" に於て會話會。「エスペラント展覽會」豫告。7月21日—26日。

7日間。於平野町ガスビル二階催場。會展覽會には、此度 C. E. S. にて集めた世界各國の

Esperanto に關する定期刊行物、其他新聞、教科書、兒童の作品等を陳列す。

★學會廣島支部——5月1日廣島エス會を解散して學會廣島支部を設立す。代表者高橋謙博士。事務所——廣島市大

手町七丁目八九同氏方。例會毎月1日15日19



時より催す。5月27日公用で來廣された小坂狷二氏を市内袋町精養軒に招き晚餐會を催す。席上同氏のフモーロに満ちたエスペラント談を聞く。發音の話、エスペラントの歴史、施行談、各國の方言等につき、博なる氏の常識の一端をうかがいて益すること甚大であつた。22時散會。多忙中特に本支部のため御參會下さつた同氏に深謝す。6月11日——オランダの同志バン・ヒンテ氏夫妻來廣の報に接し高橋支部長驛頭に迎ふ。下車せず直ちに宮島に行き宮島ホテルに投宿す。夕方野村氏が同氏夫妻を訪問し快談す。

**滿洲** ★奉天エス會——事務所（奉天滿洲醫科大學生理學教室内）會長、安部淺吉。庶務、伊藤修（大學關係）。大石榮一（鐵道總局關係）。會計部、峯下鐵夫。學藝部、尾花芳雄。聯絡部、大谷正一。通信部、西村保男。——例會は毎木曜日午後5時より醫大生理學教室にて開催、目下「ベツレヘムの子供」を輪讀中、出席者10名内外。

★學會新京支部——6月1日19時、新京支部發會式を饒村醫博經營の新都病院三階講堂に開く。會する者15名。君が代合唱に始り支部設立經過報告、エスパーロ合唱、座談會に移り饒村氏が先年萬國エス大會出席の序にビヤリストツクに立寄りザメンホフ博士の寢室の跡を訪問した巡懷談あり紀念撮影の後20時30分散會した。



新京支部發會式

## 鐵・道・と・エ・ス

**東京** 研究會——毎週木曜日萬澤嬢指導の下に熱心に輪講を續けてゐる。中等講習會——初等講習に引續いて開講したが出席率も相當良好である。講師高橋菊藏氏。受講者10名。ビクニーコ——5月16日眞鶴岬へ。源頼朝の遺蹟を訪ねたりする。



第14回九州エスペラント大會

**札幌** 婦人だけの Akacia Kunsido が誕生して以來猛烈な活潑さ近況次の如くである。初等講習について會話練習會を週二回月、水曜、退聽後と正午休の二組に分れて用いてゐる。エスペラント讀本を讀む會も週二回火、木曜、中等讀本輪講の會を週二回火、金曜。程度に應じて諸種の會を催してゐる。會の代表者小森氏が突然釧路保線事務所へ轉任されたので、後任として次の通り決定。

札幌市札幌鐵道局電氣部通信課 穴戸武志  
**旭川** 北海道大會の準備に忙殺されてゐる。札幌の阿部、村山嬢4月25日來旭。大會に貴重な經驗談を聞かして頂いた。

**吹田** 中等講習は根強く毎週火、金開催中。  
**新潟** 5月12日より新潟鐵通局内に初等講習會を開いてゐる。第1日宣傳講演會を催した。新潟醫犬の生理學の横田博士並久保義郎氏、聯盟本部より派遣の鎌田委員が講演した。講師は嘗て東京より轉任の安藤秀氏。受講者15名餘。

## 新聞雜誌とエス

★大阪朝日(5月2日)——溫泉郷に描く國際佳話としてエ・アダム氏と竹内藤吉氏の記事。  
★名古屋新聞(6月11日)——「國際親善レコードアメリカよりはるばる到着」と題しエスペラントレコードの記事掲載。  
★京都日出新聞(6月5日)——エス語を通じ京名物を宣傳——カニヤ書店主中原脩司氏。

## 新しい住い

大阪市住吉區住町1617(南海上町線帝塚山三丁目東) 川崎直一



★東京朝日北海版(6月6日)——兒童の國際親善——小樽量德女子小學校の記事。

★東京朝日(6月16日)——帝大生案に輝く愛國切手——若くして逝いた土井英一君の至誠。

★岐阜新聞(5月25日)——ヴァン教授夫妻岐阜エス會と鶴飼に交歡。

★岩手日報(6月6日)——宮城女學校講師菊澤秀生氏の盛岡に於ける講演會記事。

★東北帝大新聞(6月14日)——ザメンホフの辯護——小泉七郎。

★無我愛(5月20日)——宗教日本の大自覺批判晚餐會に出席して——バン・ヒンテ。

★水産試験場報告第八號——木村喜之助著『標識放流試験より見たる「ぶり」の移動』なる論文中、田口龍雄氏著 *Studoj de markita Fiŝo* (R. O. 16 (5)) を引用されてゐる。

★春の丘(第4號)——日本のエスペラントに就て——中田勝造。

★緑旗(6月號)——世界の歸一と言語の統制——玄永變。

## 地方機關誌その他

★La Fervojisto (鐵道聯盟)(67號) 菊判15頁。或る「エスペランティスト」の反省(横井領郎)。車輛術語[15](根本)。

★La Ora Delfeno (名古屋)(2號) 菊判22頁、Kvinjara Kreskado (竹中)。N. E. S. 回顧5ケ年(竹中)。

★La Ora Delfeno (名古屋)(3號) 菊判18頁。Bileto (Nacuaki) 外人同志と名古屋エス界(12)(山田 弘)。

★Scienco (大阪)(第2年第1號) 菊判27頁。術語定め(前田勤)岡本「新選和エス辭典」中の専門語に就き語る會。

★La Elektrujo (東京)(No. 11. 12.) 16頁。

★La Fenikso (旭川)(3號) 菊判8頁。第6回北海道エス大會豫告報道。

★Nia Paŝo (桑名)(3號) 菊判8頁。野望家たれ!(赤井)——4號)頭を作れ腹を練れ!(赤井)——(5號)批評活動を盛にしたい。(加藤)

★La Informilo (婦人エス聯盟)(4號) 菊判10頁。全國圖書館綠化に就いて諸姉に。(常任委員會)。

## ANONCETO

### Orienta Kulturo no. 4

(七月十五日發行)

ポーランドの首府ワルシャワ……H. ゲルブ  
ポーランド婦人の社會的地位……同上  
ワルシャワ起原傳說、ポーランド民謡、  
世界史の動向(東洋史序論 II)……露木清彦  
北歐風土記 I: ラトビヤ篇……H. ゲルブ  
南洋寫真だより(宮武正道)。その他。

一部 30 錢 下 3 錢 小報規約無代呈

學會取次 東京駒込動坂 228

東洋文史研究所

## PETO!!

Porkeĵuna fraŭlino povu esti sendata Svisujon, por resaniĝi je blindiĝo, ni petas al la tutmonda samideanaro donace sendi ĉiajn, uzitajn poŝtmarkojn. Ni bezonas unu milionon; jam havas 300.000 Ne prokrastul Urgas! Ĉiuj kvantoj estas bonvenaj. Por la helpkomitato volonie akceptas poŝtmarkojn.

s-ro P. J. W. SCHILPEROORD,  
c/o Berkelselaan 43 b-Rotterdam-N.

## NI KORESPONDU

Samideanôj „Lasta rikolto“ deziras korespondi pri agrikulturo. Bonvolu adresi al: Stanasor, Kneĵo'-Bulgazio.

★Budapet, Japana-klubo de Societo Országos Baross Gábor Kör.

VIII. József krt. 70. I. Hungarujo.

Prezidanto: Kovács Gusztáv.

日本人と文通希望者多數、日本文にても英獨佛語にても可。P. I. Libro 交換したし。

## 御 注 意

„全國各地報道“へ御寄稿の場合は本欄劈頭に掲げたる „投稿注意“ を御一讀の上爲され度し。

(編輯部)



## 事務局だより

★先般御一身上の都合で退任された岡本好次氏は永い間本會の書記長として、會務に貢献せられましたので退職慰勞金として金三百九十一圓八十二錢を差上げました。但しこの内九十一圓八十二錢は、昭和十年十二月本會が氏の爲めに加入負擔して來た保險金壹千圓に對する二ヶ年分の保險料であります。昭和七年四月一日本會が氏を招聘するとき、本會と氏との間には、氏が本會の専任書記として著作及び出版事務、機關誌編輯、語學上の指導に従ひ、その著作物に對する著作権は無償で本會に屬すること、これに對し本會では氏に手當として月壹百圓を支給すると云ふ意味の誓約書を取交はしたのでした。今回退職される迄まる五ヶ年、氏は、この誓約を重じ、毀譽褒貶を度外視して、一意専心會務に盡されたのであります。(M. G.)

★正會員、特別、賛成、終身會員諸氏へ——ここ數ヶ月のあひだ非常に忙しかつたため、IEL の membokarto をお送りするのが、大變おくれてをりましたが、fino 萬澤が、お忙しいなかを手傳つて、正會員名簿を作り、membokarto に印字をしてくださつたので、お名まへのローマ字つづりのわかつてゐる方へは、六月中には、お送りする見込みがつかしました。會費が前金切れとなつてゐない方で、七月五日ころまでにお受取りにならない方は、姓名のローマ字つづりを書き添へて、お問ひあはせください。何分、いろいろ混雜してをりましたので、手ばかりもあると存じますが、上に述べたやうに voluntulino の sin-ofeaa helpo によつて、やつと片づけたやうな次第ですから、あしからずおゆるしく下さい。(IEL 代表秘書部)

★なにぶん、いつも仕事におひまはされてゐるぼくは、persona letero には、返事を書くひまが、ほとんどありません。そのくせがついて、oficiala な性質のものでも、ぼくあてになつてゐると、つひ、返事をおくらせ、たびたび、ひどいお叱りを蒙り、すつかり恐れ入つてしまひます。ぼくあてになつてゐますと、どうしても、あまへた氣持になりすから、お急ぎの用事のばあひは個人の名まへを書かないでください。さうすれば、他の事務員でできることは、その方でどんどんかたづけますし(他の事務員は、ぼくほどには、仕事におはれてゐませんから)、ぼくの方へまはつて來ても、學會あてのものは、できるだけ早くかた

づける心構へになつてゐますから。(M.S.)

★7月11日(第2日曜)を休みますから、その日は學會を御訪問なきやう。

Espero 練習會 今年の大會には、“Espero”を正しく歌ひたいといふ希望のもとに、大會組織委員會では、6月の幹事會で、7月から毎月第3日曜午後2時から、學會で、安井義雄氏指導のもとに Espero 練習會を開くことになつた。會費は不要。男女を問はず、出来るだけ多くの人の參加を希望する。7月の會は、18日。

## 編輯後記

★編輯部員一同多忙の爲積極的に原稿を御願ひする暇もありません。運動に關する評論、語學的研究、エス文記事等、諸氏のそれぞれの分野に於ける活動の記録として本誌を飾りたいと思います。但し原稿の採否、掲載の前後、部分的内容の訂正は編者にお任せ下さい。◇エス文記事、殊に文學作品のエス譯に當つては充分その作品を選定して下さい。又原文に忠實ならんが爲に往々原文と似ても似つかぬ表現を氣付かづに居られる方が多い様ですが注意して下さい。文献として本誌所載の御自分のものを多方面に配布されたい意圖ある方はその紙型から低廉に抜刷の便宜を御計らひ致します。(露木)

★私の持分は、他の委員達のやうに特に決めておかなかつた。この方がヨリ仕事し得ると思つたから。ところが駄目、と云ふのは直き治る筈だつた僕の網膜炎が未だにこれ以上仕事することを許さない。誤植の多いことに對しても、この點からお宥しを乞ひ度い。併し追々もつと出来るやうになるとおもふ。

◇毎號發行が遅くしまして、洵に申譯御座いません。會員諸氏へ厚くお詫び申し述べます。本月號からは是非早く出し度いと努力致して居りましたがヤハリ遅くれて了ひました。尤も今回は校了に迫つて、印刷所が大改築されましたので、この爲めにだいぶ迷惑致しました。會員の皆様は御了承下さるやうお願い致してをきます。(酒井)

\* \* \*



## Z. 詩 “AL LA FRATOJ” の作曲懸賞募集

——日本エスペラント學會主催——

この程、目出たく華燭の典をあげられた長友岩下順太郎、五百枝夫妻より「私達の結婚を御祝ひ下さつて同志の方々から贈られた金が70圓餘りあるが、なにかエス界のために使用して戴きたいと」當學會へ御寄贈戴くことになったので種々協議の結果、最も有意義に、且つ岩下氏の意圖にも添ふやう茲に以下の如き規定を設け、Z. 博士原作詩 “Al la Fratoj” の作曲を公募することに決定した。これはわれわれが從來から持つてゐるところの「エスペーロ」や「タギージョ」の外になにか新しい歌曲を、われわれの集會、或はピクニーク等に氣安く朗らかに平易に歌ひ得るものをつくらうではないかと言ふ意見が一致した事と、作曲の公募に當つてはエスペラントの宣傳上、多大の効果が得られる事である。幸ひ、音樂評論社の好意により雑誌「音樂評論」誌上にこの應募規定その他記事の便宜を計つて貰へる事になったので一般音樂愛好家への宣傳にも充分なる事と思はれる。同志諸兄弟の應募は勿論御知友の音樂家には是非御勧誘下さつてこの意義ある企を盛んにして戴きたい。

### 應募規定（概要）

★別記 Z 作詞「兄弟に」のエス歌詞に作曲する事。

★曲の形式は隨意なるも平易、簡明にして容易に唱し得る事を要す。

從來のエス歌曲は多く外國人の作になりて邦人の唱するに困難なるため一般邦人

の歌唱にも適する事を要件とす。

★曲はピアノ伴奏を付する事。

★應募者は9月15日迄に「東京市本郷元町一の一三日本エスペラント學會」宛「應募歌曲」と朱書して提出する事。

★應募者は匿名差支へなきも樂譜に住所名を名記する事。

★審査は堀内敬三氏に委嘱し、入選者氏名は當學會發行の雑誌「エスペラント」及び機關誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」十一月誌上に發表する。

★入選作は二篇とし入選一席には金五拾圓を次席には金貳拾圓を贈呈す。

★入選曲は當學會にその著作権を保有するものとし場合によりては多少改作を委嘱することあるべし。

★入選作なき場合には選外佳作一篇に對し金貳拾圓を贈呈す。

★應募曲は返戻せざるを原則とするも特に返却希望の方は返送料同封の上譜面上にその由記入の事。 (以上)

## エスペラント發表五十年 記念放送

——JOAK より全國中繼——

7月13日午後6時より30分間、JOAK より全國中繼でエスペラント發表五十年記念の講演が放送される事になった。

エスペラント用

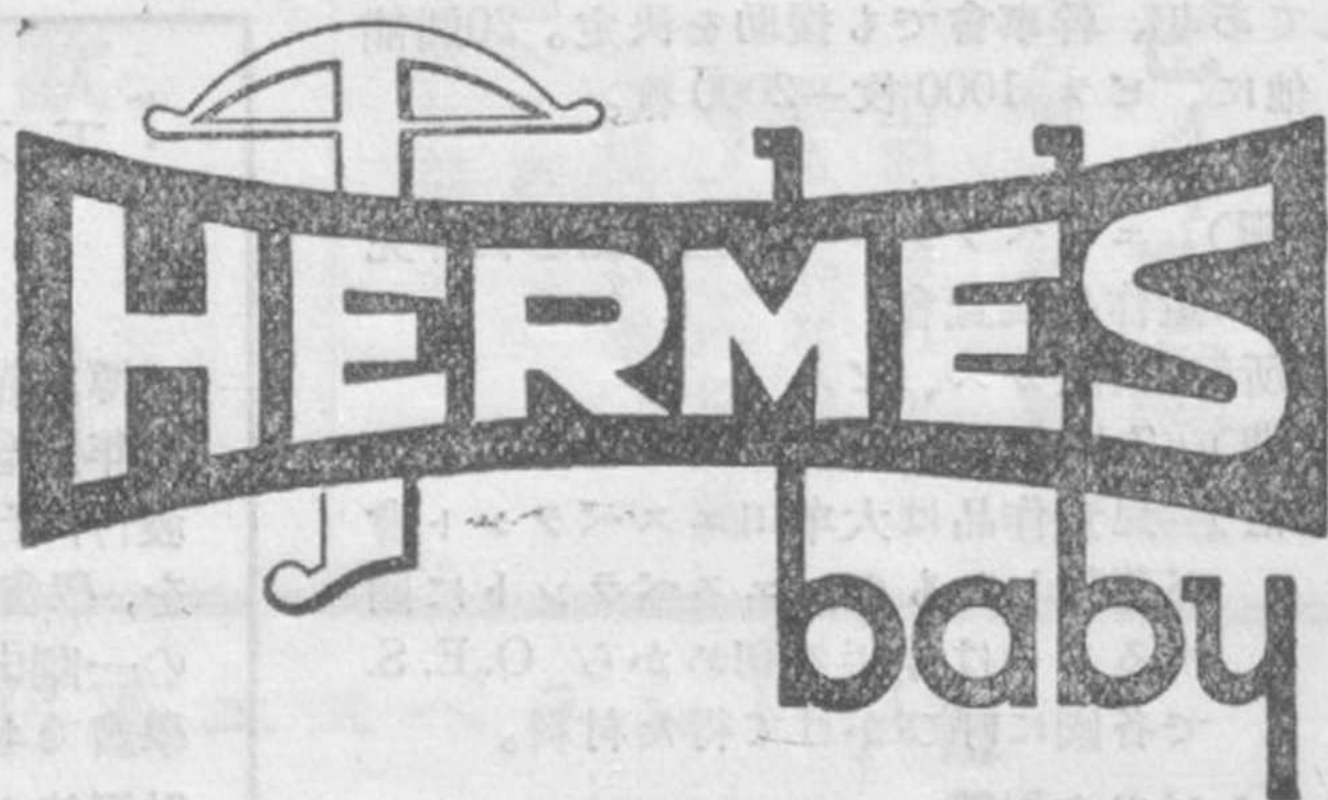
タイプライター

(英文、佛文も打てる)

☐ 説明書申込次第送呈 ☐

定價百三十圓 (送料不要)

財団法人 日本エスペラント學會





# エスペラント運動後援會

## 報告 (第二年) 3

6月12日(土)午後 7.00-9.00 第3回幹事會 (出席) 小坂、渡部、万澤、松本、高木(貞)、高橋、碧川、酒井、久保、他に、三宅、岩下、露木。(缺席) 美野田、井上、伊藤、原田、久留、三石。

★中等學校長へ質問書を送ることについて、果して、返答の期待が出来るかどうか問題になり、一應、ある地方を限つて、試みをすることに決定。

★先々號に發表した、此の夏オランダに開かれる「少年團大會」日本代表者へ、エスペラント書籍を贈呈する件は、三宅氏によつて果された。アムステルダムで開かれる第五回世界少年團大會に参加する代表は團長他 10 名で、10日出發前、文部省内の同本部を三宅氏訪問。交渉の結果、書記寺岡氏を通じて、各代表宛、捷徑、會話、綠星章を「少年團大會ではエスペラント語を學んで行くと非常に役に立つ」といふ趣旨の手紙をそへて、贈呈した。

### ★日本學藝新聞へ廣告。

先頃好意的にエスペラントの廣告を大々的に無料でひきうけてくれた同新聞に廣告を出してはとの提案がある。5 圓宛二回出すことに可決。

### ★大阪エス會より。

次のやうな要項で大阪エスペラント會が展覽會を開くについて、後援會に補助を希望して來た。非常に詳細な準備記録と、會場圖封入してあり、幹事會でも援助を決定。20圓補助、他に、ピラ 1000 枚—2000 枚。

#### 要項

(名稱) エスペラント 50 週年記念世界兒童作品展覽會

(場所) 大阪ガス、ビル

(會期) 7月21日—27日

(其他) 兒童作品は大牟田エスペラント會が蒐集したもの。エスペラントに關するものは今年の初めから O. E. S. で各國に呼びかけて得た材料。

### ★オリンピック對策。

Heroldo が 920 號に Esp. en la Olimpiadon! と題して、堂々宣傳をしてをり、同

號を百部も學會宛で送つて來た。日本でも色々對策を講じなければならぬので、幹事諸君から夫々、具體案をきいた。

1. 日本のオリンピック級の選手にエスペラントに關する demando を送る。
2. 日本の組織委員會の prezidanto へ呼びかける(内外から)。
3. オリンピックに關するニュースを外國へエスペラント語で送るために、特別のスクラップをつくる。

等々が先づとりあげられた。

### ★婦人エス聯盟より。

全國圖書館綠化運動の中間報告が、万澤氏からあり、後援會からの援助を希望したが、來月まで待つて、様子をみて、改めて協議をすることに決定。

★次の幹事會 7月10日(土)。

—Junio 15, 37 久保—

## 前號誤植訂正

1. 賛。其所要ヲ認ム
2. 賛(一部)

文學博士 三上參次

右に就き必要を認め候(前號認めずは誤植)その他の項に就きては簡単に御返詞申上兼ね候故こゝには意見を保留致したく候あしからず御承知被下度候。

## 『エスペラントの基礎』 特 賣

博文館では、エスペラント發表五十周年記念のため、7月14日まで、同社發行、石黒修氏「エスペラントの基礎」を、學會會員に限り、定價(2圓30錢)の一割引で提供するとのこと。注文は、學會でも引受ける。

財團法人 日本エスペラント學會  
東京本郷元町・振替東京 11325



# エスペラント文藝讀本

各國文學のエスペラント譯から、その粹を集めたもの。中等講習會の教材として、研究會、輪講會の資料として、また讀物として好評。いづれも註および解説附ゆる獨學研究用にも適す。この叢書の權威に就いては敢て説明するまでもなく、編纂者の顔觸れを示すだけで十分であらう。各冊三五判 70 頁乃至 100 頁、用紙上等、印刷鮮明、裝幀瀟洒、然も驚くべき廉價。續々刊行

小坂狷二編

## 1 スラヴ篇

定價二十五錢・送料三錢

ツルゲネフ「散文詩」  
プーシキン「吹雪」  
アレドレーエフ「血笑記」  
その他、トルストイ、ゴーゴル、チェホフ、シエンキエウイチ等、スラヴ文學の精華をあつめてある。

川崎直一編

## 2 フランス篇

定價二十五錢・送料三錢

ドーデ「スゲン氏の小山羊」  
ユーゴー「レ・ミゼラブル」  
メリメ「カルメン」  
ヴェルレーヌ「秋の歌」  
フランス「マリア様の魔術師」  
ボードレール「信天翁」  
ヴォルテール「カンヂド」  
すべてこれ、フランス文學の珠玉の名篇ぞろひ

三宅史平編

## 3 シェイクスピア悲劇篇

約百頁・定價三十錢・送料三錢

ハムレット  
マクベス  
リア王  
ジュリアス・シーザ  
上記四篇のうちの最も劇的な場面を選び、これに各篇の梗概を添へ、エス文の懇切な註を加へてある。  
別に「十四行詩」二篇を加へる。

高木弘編

## 5 北歐篇

定價三十錢・送料三錢

アンデルセン童話二篇  
スカンディナヴィアアルグレン短篇小説  
ア半島とデンストリンドベリ拔萃  
マルクの四大イブセン戯曲幽霊拔萃  
作家の傑作集  
附録「アンデルセンとザメンホフ」はザメンホフ研究に一新面を拓く論文(和文二十ページ)。エスペランチスト必讀。

財團法人 日本エスペラント學會

東京本郷元町一・振替東京 11325 番



# 本會取次内地發行圖書

・ エスペラント研究社發行書 ・

堀 弘 和 :	新和エス小辭典	日常語新語を收録した ポケット用の豆和エス	價 20 錢 送料 3 錢
トルストイ 作・ シリコフ 譯・	イワンの馬鹿	トルストイ作民話中の 最傑作・譯文最も平易	價 40 錢 送料 3 錢
ツルゲネフ 作・ カーベ 譯・	散文詩本	珠玉の名品五十の名譯 親切な獨習用註釋付き	定價 1 圓 送料 6 錢
佐々城 佑 :	模範エス讀本	譯讀會話作文の平行的 進歩をはかる・問題付	價 35 錢 送料 3 錢
堀 弘 和 :	緑の歸	多種多彩興味ある讀物 中等講習向き小形讀本	價 30 錢 送料 3 錢
菊池寛 作・ 堀 弘 和 譯・	父洗濯屋と詩人	菊池寛作中最も著名な 戯曲・譯も上演に好適	價 30 錢 送料 3 錢
金子洋文 作・ 東京宮豊達 譯・	洗濯屋と詩人	明朗なユーモアに富む 初期無産派の社會劇	價 30 錢 送料 3 錢
志賀直哉 作・ 堀 眞知子 譯・	范の犯罪	珠玉の名作「范の犯罪」 と「やどかりの死」二篇	價 30 錢 送料 3 錢
岡本綺堂 作・ 三宅史平 譯・	修禪寺物語	綺堂の最傑作・歐洲で も屢々上演した名戯曲	價 30 錢 送料 3 錢
林房雄 作・ 堀 首藤共 譯・	繪のない繪本	全巻を十二夜に分ち 月が語る世界の種々相	價 30 錢 送料 3 錢
江戸川亂歩 作・ 下村芳司 譯・	一枚の切符	一枚の切符を手掛りに 複雑巧妙な犯罪の發覺	價 30 錢 送料 3 錢
同 :	黄金假面 I	我が代表的探偵小説家 亂歩の日本ルパン物語	定價 1 圓 送料 6 錢
ドレーゼン 著・ 堀 弘 和 譯・	ザメンホフ	新しい批判的角度から 見直したザメンホフ傳	價 80 錢 送料 9 錢
堀 弘 和 譯註 :	黒猫の怪記	セクストン・ブレイク の本格的探偵小説傑作	價 35 錢 送料 3 錢
鴨長一 作・ 野原休 一 譯・	方文記	古典中最も傑れた文章 で書かれた隨筆の名譯	價 20 錢 送料 3 錢

・ そ の 他 ・

小坂二雀 共著・ 秋田雨雀 共著・	模範エス獨習書	外國語の素養なき人々 に適する親切な講述書	定價 1 圓 送料 9 錢
ヘルメート 著・ ロンデ 著・	エス・羅・日 藥品名彙 獨・英・佛	日本藥局法による名彙 新藥局法による増補版	定價 2 圓 送料 6 錢
野原休 一 譯 :	エス譯普門品	梵、漢原文付	價 40 錢 送料 3 錢
高石綱 譯 :	聖徳太子十六憲法經		價 15 錢 送料 3 錢
岡本利吉 著 :	美	精神と物質の兩生活の 新原理を提唱したもの	定價 1 圓 送料 10 錢

ザメンホフ博士浮彫

鈴木心齋 作  
鑄鐵製・木枠入

上 1 圓 70 錢, 並 1 圓 20 錢  
送料 (内地) 各 14 錢

東京市本郷  
元町一丁目

財團  
法人

日本エスペラント學會

電話小石川 5415 番  
振替東京 11325 番



—— 詳細内外エス書圖書目錄お申込み次第送呈 ——

定價 送料  
圓 錢

エスぺラント 捷徑	多少外國語素養ある者のため最良の獨習書…	0.50	6
エスぺラント 講座	外國語を知らぬ人のため最良の獨習講義録…	0.50	6
新撰 エス 和 辭 典	語數豊富, 譯語正確, 携帶至便 … 上	0.80	3 並 0.60 6
新撰 和 エス 辭 典	見出語數 6 萬, 出典明示, 附錄豊富, 印刷鮮明…	2.50	6
新撰 エス 文 手 紙 の 書 方	書簡百科辭書の觀, 例文豊富, 四六判 370 頁…	1.20	10
エスぺラント 日記 の 書 方	365 日, 1 日 1 文例, 社會萬般の生活記錄, 譯註付	1.20	9
エスぺラント 講習 用 書	3 エスぺラント 短期講習書	0.20	3
エスぺラント 初等 讀 本	3 エスぺラント 中等 讀 本	0.30	3
エスぺラント 童話 讀 本	3 イソップ物語 親切明快, 脚註付	0.20	3
ザ メ ン ホ フ 讀 本	ザ著作拔萃 ……全 3 卷, 各卷 0.20 3 合卷	0.50	6
エスぺラント 醫學 文 範	醫學論文の好模範, 醫學生の講習會に最好適	0.40	3
エスぺラント 發音 研究	エス語發音上の疑問を氷解す ……	0.30	3
エスぺラント 文 例 集	重要語 720 の文例 ……	0.80 6 カード 1.50	14
點字 エス 文 法 と 小 辭 典	6 エスぺラント の 鍵	0.05	3
リングヴィ・レスポンドイ	ザ 士の言語上の解答を蒐む必備の書 ……	0.50	3
國語の擁護を論じて國際語に及ぶ	黑板博士の歴史的論文其他を収む ……	0.20	3
言語學 と 國際 語	スピリドヴィッチの新言語理論 ……	0.70	6

## エスぺラント 文庫

1. ザメンホフの生涯 ……	0.40	6	3. 世界語の歴史 ……	1.50	9
2. 國際通信の常識 ……	0.50	3	4. エスぺラントの會話 ……	0.40	3

## エスぺラント 對譯詳註叢書

1.	マテオ・ファルコネ	0.30	3	4.	代理通譯	0.30	3		
2.	ハイネ詩集	0.30	3	5.	愛あるところ神あり	1.50	6		
3.	魔法使	0.30	3	6.	レイモント短篇集	0.30	3		
エスぺラント童話集				「エス童話讀本」の對譯脚註篇				0.60	6

## エスぺラント 文藝讀本

1. スラヴ篇 ……	0.25	3	3. 沙翁悲劇篇 ……	0.25	3
2. フランス篇 ……	0.30	3	5. 北歐篇 ……	0.30	3

## エスぺラント 書き文獻

惜みなく愛は奪ふ	有島武郎の傑作	上 1.00	並 0.75	6
中村精男博士遺稿	原作科學論文, 文學作品の翻譯等	0.70		6
佐々城松榮遺稿集	原作對話, 翻譯文學等	0.80		6
綠葉集	伊井迂著原作詩と詩歌俳句等の翻譯	0.80		6
日本書紀 <sup>1</sup>	神代, 神武天皇紀; II 綏靖天皇紀—應神天皇紀 各	1.20		9
ヴェルダ・カルト		1.00		6
海神丸 野上彌生子		0.40		3
骸骨の舞 秋田雨雀劇曲三篇		0.40		3
佛說阿彌陀經 漢譯對照		0.15		3
日本民族の起源		0.10		3
大學中庸	上 0.15 並 0.60			6
	日本小史	0.20		3
	東洋の俠血兒 長谷川伸	0.45		6
	倫敦塔 夏目漱石	0.15		3
	霧の中 山本有三	0.15		3
	日本刀 劍鑑	0.15		3
	孝經	0.30		3



# 本會取次内地發行圖書

・ エスペラント研究社發行書 ・

堀 弘 和 :	新和エス小辭典	日常語新語を收録した ポケット用の豆和エス	價 20 錢 送料 3 錢
トルストイ 作・ シリコフ 譯・	イワンの馬鹿	トルストイ作民話中の 最傑作・譯文最も平易	價 40 錢 送料 3 錢
ツルゲネフ 作・ カーベ 譯・	散文詩本	珠玉の名品五十の名譯 親切な獨習用註釋付き	定價 1 圓 送料 6 錢
佐々城 佑 :	模範エス讀本	譯讀會話作文の平行的 進歩をはかる・問題付	價 35 錢 送料 3 錢
堀 弘 和 :	緑の朝	多種多彩興味ある讀物 中等講習向き小形讀本	價 30 錢 送料 3 錢
菊池寛 作・ 堀 弘 和 譯・	父の歸	菊池寛作中最も著名な 戯曲・譯も上演に好適	價 30 錢 送料 3 錢
金子洋文 作・ 東京宮豊達 譯・	洗濯屋と詩人	明朗なユーモアに富む 初期無産派の社會劇	價 30 錢 送料 3 錢
志賀直哉 作・ 堀 眞知子 譯・	范の犯罪	珠玉の名作「范の犯罪」 と「やどかりの死」二篇	價 30 錢 送料 3 錢
岡本綺堂 作・ 三宅史平 譯・	修禪寺物語	綺堂の最傑作・歐洲で も屢々上演した名戯曲	價 30 錢 送料 3 錢
林房雄 作・ 堀 首藤共 譯・	繪のない繪本	全卷を十二夜に分ち 月が語る世界の種々相	價 30 錢 送料 3 錢
江戸川亂歩 作・ 江村芳司 譯・	一枚の切符	一枚の切符を手掛りに 複雑巧妙な犯罪の發覺	價 30 錢 送料 3 錢
同 :	黄金假面 I	我が代表的探偵小説家 亂歩の日本ルパン物語	定價 1 圓 送料 6 錢
ドレーゼン 著・ 堀 弘 和 譯・	ザメンホフ	新しい批判的角度から 見直したザメンホフ傳	價 80 錢 送料 9 錢
堀 弘 和 譯註 :	黒猫の怪記	セクストン・ブレイク の本格的探偵小説傑作	價 35 錢 送料 3 錢
鴨長一 作・ 野原休 譯・	方文	古典中最も傑れた文章 で書かれた隨筆の名譯	價 20 錢 送料 3 錢

・ そ の 他 ・

小坂二共著・ 秋田雨雀 :	模範エス獨習書	外國語の素養なき人々 に適する親切な講述書	定價 1 圓 送料 9 錢
ヘルメサ・ ロンドート :	エス・羅・日 藥品名彙 獨・英・佛	日本藥局法による名彙 新藥局法による増補版	定價 2 圓 送料 6 錢
野原休一 譯 :	エス譯普門品	梵、漢原文付	價 40 錢 送料 3 錢
高石綱 譯 :	聖德太子 十六憲法	精神と物質の兩生活の 新原理を提唱したもの	價 15 錢 送料 3 錢
岡本利吉 著 :	美經		定價 1 圓 送料 10 錢

ザメンホフ博士浮彫

鈴木心齋 作  
鑄鐵製・木枠入

上 1 圓 70 錢、並 1 圓 20 錢  
送料 (内地) 各 14 錢

東京市本郷  
元町一丁目

財團法人

日本エスペラント學會

電話小石川 5415 番  
振替東京 11325 番



エスペラント 捷徑	多少外國語素養ある者のため最良の獨習書	0.50	6
エスペラント 講座	外國語を知らぬ人のため最良の獨習講義録	0.50	6
新撰 エス 和 辭典	語數豊富, 譯語正確, 携帶至便	上 0.80 3 並 0.60	6
新撰 和 エス 辭典	見出語數6萬, 出典明示, 附録豊富, 印刷鮮明	2.50	6
新撰 エス 文 手 紙 の 書 方	書簡百科辭書の觀, 例文豊富, 四六判 370 頁	1.20	10
エスペラント 日記 の 書 方	365日, 1日1文例, 社會萬般の生活記録, 譯註付	1.20	9
エスペラント 講習 用 書	3 エスペラント 短期講習書	0.20	3
エスペラント 初等 讀 本	3 エスペラント 中等 讀 本	0.30	3
エスペラント 童話 讀 本	3 イソップ物語 親切明快, 脚註付	0.20	3
ザメンホフ 讀 本	ザ著作拔萃	全3卷, 各卷 0.20 3 合卷 0.50	6
エスペラント 醫學 文 範	醫學論文の好模範, 醫學生の講習會に最好適	0.40	3
エスペラント 發音 研究	エス語發音上の疑問を氷解す	0.30	3
エスペラント 文 例 集	重要語 720 の文例	0.80 6 カード 1.50	14
點字 エス 文 法 と 小 辭 典	6 エスペラント の 鍵	0.05	3
リングヴィ・レスポンドイ	ザ 士の言語上の解答を蒐む必備の書	0.50	3
國語の擁護を論じて國際語に及ぶ	黑板博士の歴史的論文其他を収む	0.20	3
言語學と國際語	スピリドヴィッチの新言語理論	0.70	6

## エスペラント 文庫

1. ザメンホフの生涯	0.40	6	3. 世界語の歴史	1.50	9
2. 國際通信の常識	0.50	3	4. エスペラントの會話	0.40	3

## エスペラント 對譯詳註叢書

1. マテオ・ファルコネ	0.30	3	4. 代理通譯	0.30	3	
2. ハイネ詩集	0.30	3	5. 愛あるところ神あり	1.50	6	
3. 魔法使	0.30	3	6. レイモント短篇集	0.30	3	
エスペラント童話集	「エス童話讀本」の對譯脚註篇				0.60	6

## エスペラント 文藝讀本

1. ス ラ ヴ 篇	0.25	3	3. 沙 翁 悲 劇 篇	0.25	3
2. フ ラ ン ス 篇	0.30	3	5. 北 歐 篇	0.30	3

## エスペラント 書き文獻

惜みなく愛は奪ふ	有島武郎の傑作	上 1.00 並 0.75	6
中村精男博士遺稿	原作科學論文, 文學作品の翻譯等	0.70	6
佐々城松榮遺稿集	原作對話, 翻譯文學等	0.80	6
綠 葉 集	伊井迂著原作詩と詩歌俳句等の翻譯	0.80	6
日本書紀	I 神代, 神武天皇紀; II 綏靖天皇紀—應神天皇紀	各 1.20	9
ヴェルダ・カルト	日本小史	0.20	3
海神丸 野上彌生子	東洋の俠血兒 長谷川伸	0.45	6
骸骨の舞 秋田雨雀劇曲三篇	倫敦塔 夏目漱石	0.15	3
佛說阿彌陀經 漢譯對照	霧の中山本有三	0.15	3
日本民族の起源	日本刀 劍 鑑	0.15	3
大學中庸	孝 經	0.30	3



# 日本語譯「エスペラント第一書」

## エスペラント五十周年を記念する貴重な文獻

ちやうど半世紀まへ、1887年ロシア曆7月14日、エスペラントの誕生を世界へ告げたのが、いはゆる「第一書」である。これは、その「第一書」の主體たる「序文」の、はじめての完全譯。これにおさめられた文例は、エスペラント最初の文章であり、「序文」の下半分は、エスペラントにもいまだ譯されてゐない貴重な資料。これに加へる親切な解説と詳しい註はザメンホフ再認識への新しい出發點を與へるもの。われわれの一人として見逃してならないこの文字は「エスペラント」七月號に、堂々22ペイヂを占めるエスペラント發表五十周年記念の特輯記事である。いつもの月は「エスペラント」誌を讀まない人でも、この特輯記事だけは、ぜひ讀まなければならない。いますぐ讀む準備も興味もない、極めて初歩の人もとにかくも、この一冊は、ぜひ買つておかれたい。さもなくば、やがては後悔する日が來るであらう。この他に、「エスペラント」七月號には、めづらしいチッコの映畫「はだしの少女」の物語、興味深い淺田一博士の通俗醫學讀み物「唾液」などがある。一部20錢、送料1錢。すぐ書店へ駆けつけられよ。

東京本郷元町 財團法人日本エスペラント學會 振替東京11325番

我が國唯一の全エス文月刊新聞

# テンポ

我が國にエス語運動が起つてから既に三十年。吾等も早やエス語の顯微鏡的詮索のみに満足してゐるべきではあるが、この名に相應の廣く大く開いて世界人類の爲に一躍大貢獻をすべしと使命を爲す。この目的と使命を爲すに生れたのが「テンポ」誌であります。この誌は四年の哲學、科學、藝術の總ゆる分野に亘る學術論文を發表し、その内容の豊富と輕妙なる模範的な筆致とを以て海外全エスペラント界に一大トピックスを提供しつゝあり。今年では世界的に見てもエス語誕生五十周年といふ實に意義深い年であり、讀者とおなり下さるゝことを切望致します。近年、爲替相場に依る日本貨下落の爲、外國雜誌購讀の不便なことがしばしばある。この「テンポ」誌の發行は、將來の發展を期して、尙ほ理想の讀者の國際陣を強固ならしめ、將來の發展を期して、今年度の萬國エスペラント大會には吾等の代表中原脩司氏をボランテアとして派遣することゝなりました。同氏は大會中各國著名エスピアストに接近して「テンポ」誌の爲に協力される様盡力されることになつてゐます。大いに御期待と御聲援下さる様、併せてお願い致します。

★『テンポ』見本誌一部金十五錢  
★購讀料一ヶ年金壹圓貳拾錢(送料共)

テンポ誌發行所 國際時事新聞社

京都市寺町夷川上ル  
電話上二五五五  
振替大阪二三四〇四